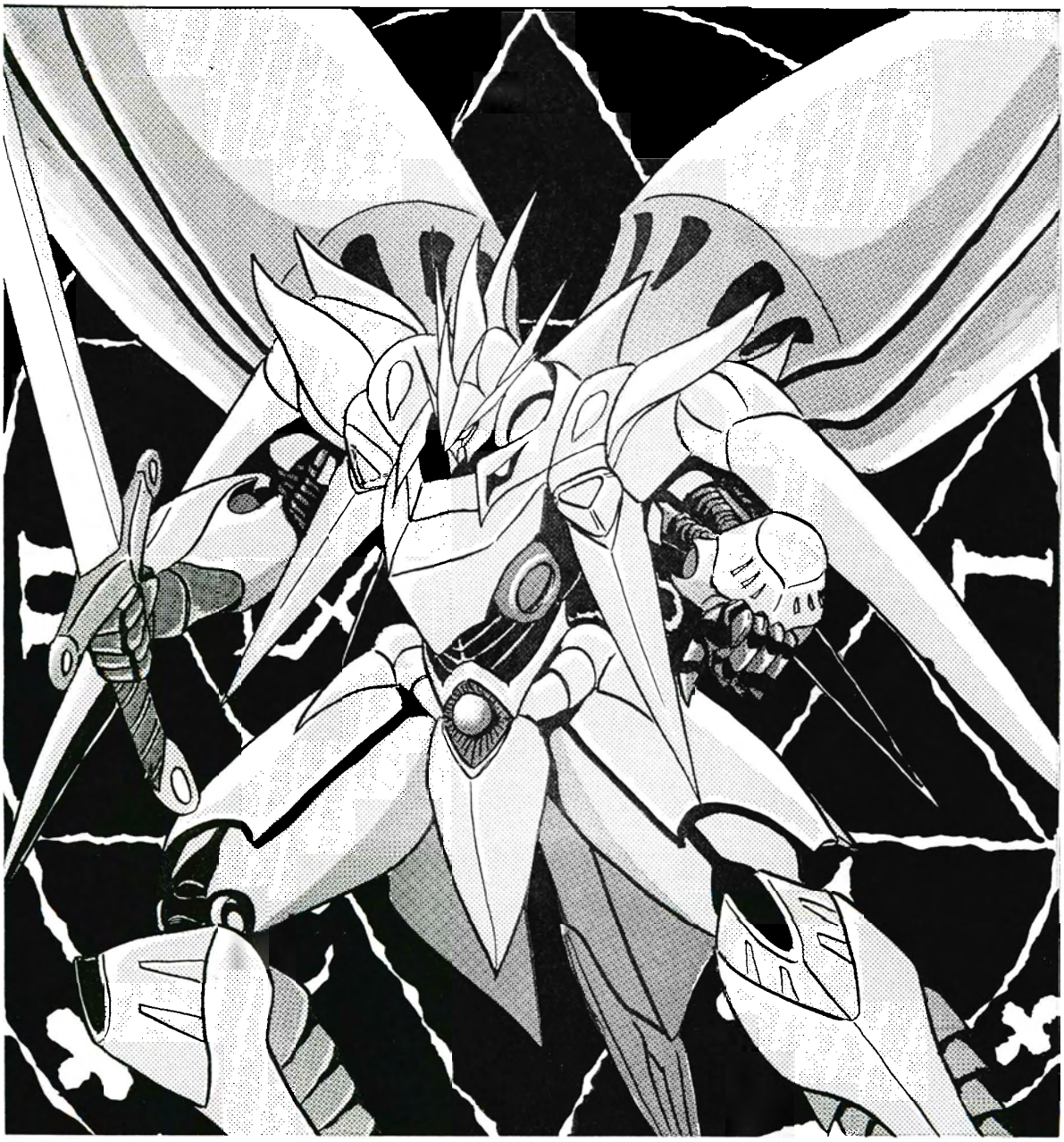
Blowers26



船内配置図

DECK	CLASS	NAME	HOST	
3	1st	Final Troop	正宗征士 井村和正	
7	2nd	真鶴学園風雲録（前）	岬当麻	
16	3rd	笠原電脳診療所	笠原和子	
18	2nd	真鶴学園風雲録（後）	岬当麻	
21	3rd	三等雑居室	YOU!	
27	2nd	Peace Presser MAYA	本居小次郎 幻	
37	2nd	Strain at the Leash	大和楓	註）逆順

今回の最終的な進捗

ドライブ C: のボリュームラベルはありません．
ボリュームシリアル番号は 1ED1-0E19
ディレクトリは C:¥

```
95ANQ    TXT     1399 95-01-16  12:32
B26      TXT    18283 95-01-29  18:20
B26INDEX TXT      230 95-02-06  14:57
B26MNZ_A TXT    29337 95-01-29  17:56
B26MNZ_B TXT    10155 95-01-29  17:42
CLINIC5  JAW    14848 95-01-31   5:48
FT2      WJ3     6133 95-01-24  12:24
FT2      TXT     2395 95-01-29   1:16
FT2      FJ3      376 95-01-22  22:12
PPM10    JAW    19968 95-02-06  14:41
       11 個          103124 バイトのファイルがあります．
                     1141760 バイトが使用可能です．
```

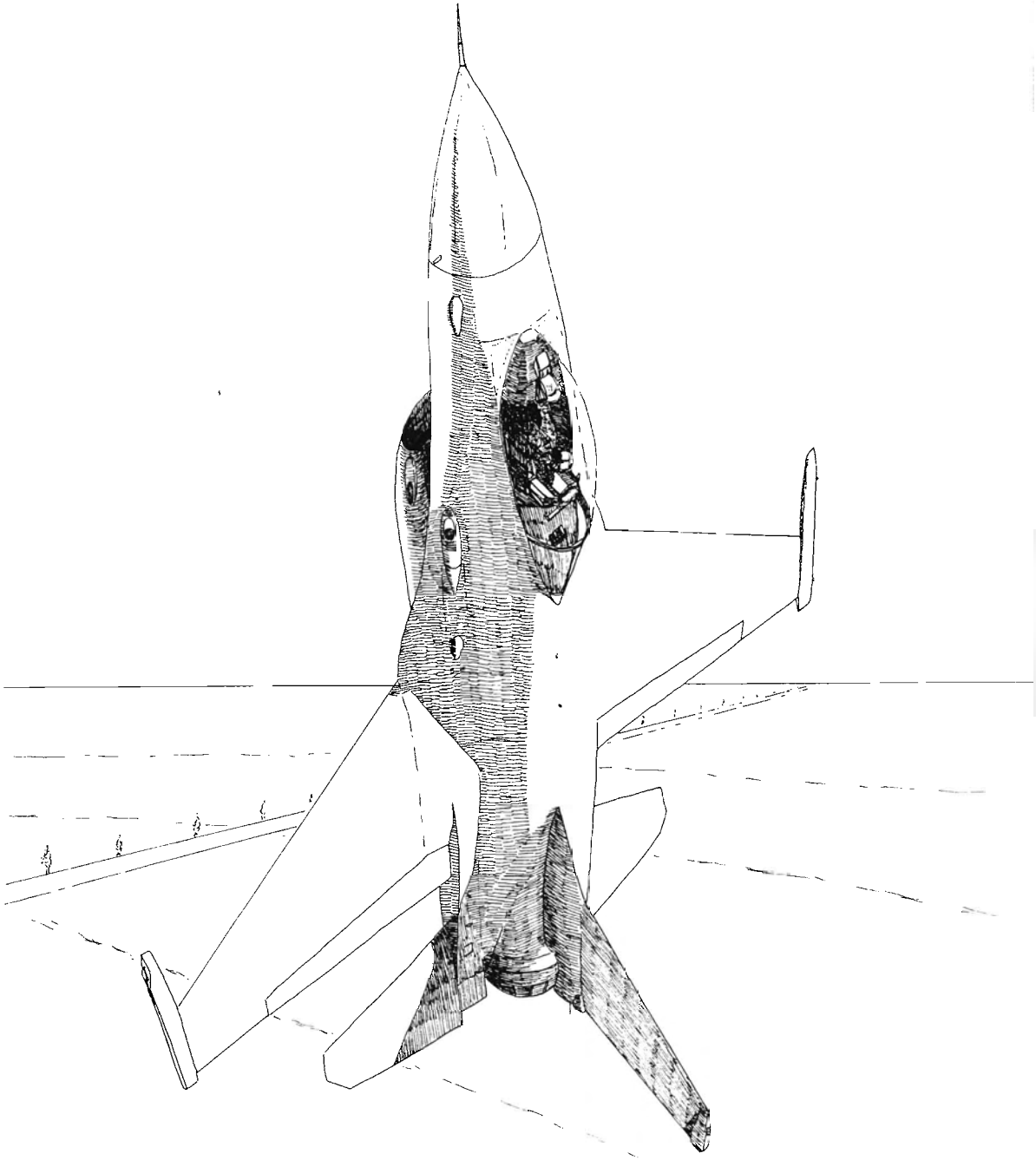
※ご覧の通り、大体の原稿は1月中には上がってたんです。こんな事言ってても何の弁解にもならないのは判ってますけど ....
　ちなみに今回載ってる絵の方の原稿は、全て1月中旬までには仕上がってます。全て私の余裕のないスケジュールが元凶なんですよ、もう .... 何で学生時分から寝る気力も失せるほど疲れる過密スケジュール組まなきゃならんのでしょうね ....

「Blowers」価格再設定のお知らせ
　この本にかかるコストを厳密に検討した結果、以下の通りとなったので、再び Blowers に代価を設定したいと思います。どうも何か勘違いしておられる方もあるようなので ....

コスト諸元
　　印刷代　片面 10 円、B5 判 40 ページとして 200 円
　　郵便代　190 円
　　封筒代　15 通 200 円前後、一通約 10 円

　以上より、読者の方には今度の号から一冊 400 円を頂戴したく存じます。送金は 80 円以下の郵便切手による常識的な組み合わせ、あるいは無記名でかつ充分な猶予のある定額小為替にてお願いいたします。その他、銀行／郵便振り込みによる送金も現在検討中です。こちらは「通年分」としてのお支払いになると思います。
　ただし定期的な原稿を担当されている方、あるいはこちらからお願いして参入していただいている方は、慣例上今後もお代はいただきません。
　カンパの類も大歓迎ですが、今はその余裕があったら神戸に送って下さい。
　急な話ですが、よろしくお願いいたします。

Fox Away



第一回　結果概況

早朝小松へ移動した部隊は、息をつく間もなく出撃に駆り出された。東側の進撃はそれだけ鋭かったのである。既に敵は予定戦場を突破しかかっていた。周辺地形がもう少し良好であったなら、西側の部隊は一日と持ちこたえられなかっただろう。第一波が上空にさしかかると、既に敵編隊は迎撃に上がっていた。大部分はMiG-21である。
米軍編隊が自国の交戦規則で手をこまねいている内に、傭兵隊のF-14やSu-27といった機体が、持ち前のスタンドオフ能力を活かして先制をかける。しかしスパローのような長射程ミサイルは元々が爆撃機を迎撃するための物で、さしたる戦果は上がらない。すぐに格闘戦に入った。実際に戦ってみると、敵の技量はそれ程高い訳でもなく、物量で押しているような観がある。結局のところ第一ラウンドは敵味方双方に燃料と弾を浪費させるだけに終わった。
予定通り、間髪を入れずに第二波がやって来る。今度は地対空ミサイルが彼らを迎えた。敵もその辺りはお見通しだったのだ。だが「お約束通り」と言うべきか、まず当たらなかった。確かにおっかないが、それだけだ。第二波の爆撃は第一波のそれよりはまともな戦果を上げる事ができた。
続いて第三波。こちらは完全に読みが当たった。敵の防空隊の燃料が切れかかり、交代がやって来るまでのわずかな隙に飛び込む事ができたのだ。しかし初日にして既にこの第三波は後尾の部隊が迎撃機に捕まった事も有り、二日目からは第二波に編入された。

別動隊は機種のばらつきがあまりにもひどく、整然とした指揮系統は最初から放棄された。文字通り「各個撃破」が実施されたのだ。これが効いた訳でもなかろうが、部隊の損害は軽微だった。その代わり、戦果も微々たる物だった。
作戦完了後、前線は直江津まで押し返されていた。

第二回　作戦発表

京野大佐：よくやったと言える程の出来ではないが、感謝する。敵の前進はようやく停止した。なお、直江津まで一気に戻ったのは途中に敵の拠点が無かったからで、奴等にも無理に野戦基地を作らない程度の程度の判断能力は有ったと言う事にすぎない。決して我々の攻勢による物ではない事を忘れるな。
次の作戦を伝達する。再び小松から出撃する。今回は一旦日本海に出て、大きく迂回するコースを取って直江津より少し内陸、上越にある敵の補給拠点を爆撃する。海からのコースがばれたら今度は山側からだ。連中が水田のど真ん中に陣地を作っているのは既に確認済みだ。攻め易いのは確かだが、邪魔物が無い分、対空火器が使い易いのも事実だ。
部隊配置は次の通りだ。

※波状攻撃なし

TFW　目標上空の制空権確保
EFW　BFWの護衛
BFW　敵陣地爆撃

CS　別動、敵補給コースの通商破壊（トラック等）

大佐：CSについてはまともな指揮が期待できんようだから、放任する。現地までのコースも含めて、勝手にしろ。

参加者リスト

名前	地域	所属	機種	1st pilot	2nd pilot	OP	SC	SD	BH
井村 和正	愛知	1st BFW	F-100D	ﾃﾞﾙﾛﾝ		1	20	0	4
井村 和正	愛知	1st BFW	A-4	ｶﾞｽﾊﾟｰ		1	10	0	4
井村 和正	愛知	1st BFW	A-Jet	ﾈｲ	ﾐｭﾗ	1	8	0	2
遠藤 誠	神奈川	1st TFW	Mirge	ﾄﾞﾅﾙﾄﾞ・ﾎﾞｯｼｭ		1	4	2	0
遠藤 誠	神奈川	2nd EFW	J35F	ｷｰｽ・ﾏｸﾗｸﾗﾝ		1	5	1	0
遠藤 誠	神奈川	1st BFW	A-4	東野 正樹		1	10	0	4
菅原 忠幸	秋田	2nd EFW	F-5	ｶｰﾙ・ｼｭﾐｯﾄ		1	5	1	0
菅原 忠幸	秋田	2nd EFW	F-5	ﾂｧｵ・ﾂｫｲﾘｰ		1	6	2	0
菅原 忠幸	秋田	1st BFW	JA37	ﾘｭｳ・ｼｷﾌﾈ		38	6	0	0
曽根田 成弘	神奈川	2nd TFW	Mirge	ｾﾗﾌｨﾝ・ﾒｲﾌｨｰﾙﾄﾞ		1	4	2	0
曽根田 成弘	神奈川	1st CS	F5U	ﾊﾛﾙﾄﾞ・ﾗﾝｶｽﾀｰ		1	6	0	0
曽根田 成弘	神奈川	1st CS	P-39	ｸﾞｽﾀﾌ・ﾚﾝﾊﾞｯﾊ		1	8	0	2
日高 耕	東京	1st TFW	F-5	ｱﾌﾞﾙ=ﾌｨﾀﾞｰ		1	4	2	0
日高 耕	東京	1st TFW	F-14	ﾛﾊﾞｰﾄ・ｵｰｳｪﾝ	ｱｰｻｰ・ｴｳﾞｧﾝｽﾞ	7	3	1	0
日高 耕	東京	2nd BFW	Bcn	ﾌﾟﾘﾓ=ﾃﾞ=ﾘﾍﾞﾗ	ﾐｶｴﾙ=ｾﾙﾊﾞﾝﾄｽ	1	10	0	4
山田 国見	京都	1st TFW	Su-27	ﾎﾟｰﾙ・ﾗｰﾊﾞﾝﾄ		6	4	2	0
山田 国見	京都	2nd BFW	I-102	ｷﾗｸ・ﾅｰﾇﾙ	ｱｰﾉﾙﾄﾞ・ｶｯﾂ	1	9	0	3
山田 国見	京都	1st CS	Hur	ｼﾞｭﾋﾞﾘｰ・ﾍﾞﾛｰﾙ		1	17	0	4

切捨御免

以下の企画物は Blowrs 減量計画のため、正式に打ち切りとする。

一．王虎闘史

一．六色のダガー

一．三等食堂

一．真鶴学園ガイドブック

なお「王虎闘史」に関して何がしかの金額を送金された方は、菊地が責任を持って返金するので、至急連絡のこと。

卒業（？）記念バトテ大会の予定

できるかどうかものすごく怪しいんですけど、とりあえず日程として挙げておきます。

予定日：3月19日（日）
予定額：前回同様 5,000 円

ここのところ本の進行を思うに任せないし、2/20 から 3/10 までビッシリと研修が入ってしまっているので、また本とは別送の形で連絡を送る形になると思います。もっとも速やかにそちらと連絡が取れる手段を書き添えて、今回の参加時にでもご連絡下さい。
3/15 までにこちらから連絡が行かなければ、中止と考えて下さって結構です。

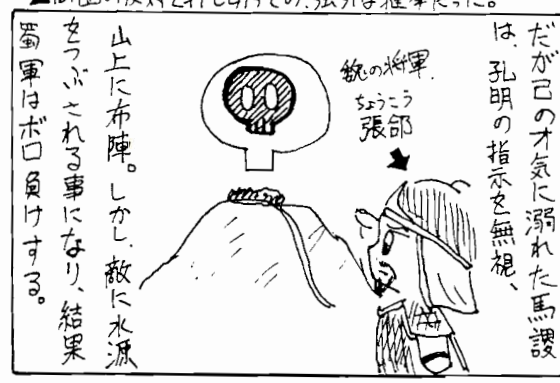
Blow27 の締め切りについて

両 PBM その他一切の参加締め切りは、2/28 とします。
発行予定は 3/31 ですが、これから更に慌ただしくなるので、ちょっと確約はできません。ただこちらとしては、たとえ年刊になったとしても発行は続けていきたいので（GG 生き残りの意地にかけて）、これからもどうか見捨てないで下さいますようお願いします。

BY 19941207 理蛾。

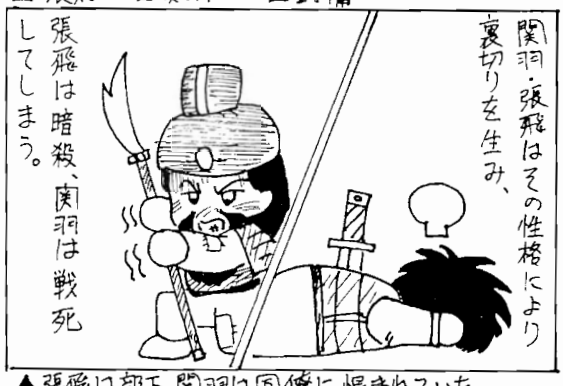
三國志Ⅱ

▲周囲の反対を押し切っての、強引な推挙だった。

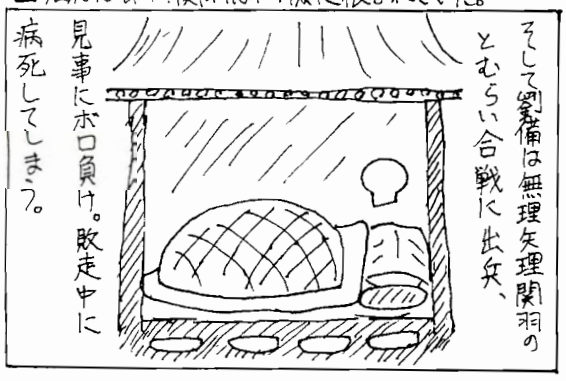


三國志

▲張飛　▲関羽　▲劉備



▲張飛は部下、関羽は同僚に恨まれていた。



学校も２月に入れば３年生が本格的に受験本番に突入し、それに影響される形で他学年も殺伐とした空気を呈するようになってくる。必ず進級できるとわかっていても、来月に迫っている学年末試験がさらに拍車をかけていた。

井村真知子は苦悩していた。この数ヶ月館の、彼女を取り巻く事情の急変が、彼女に重くのしかかるようになっていたのだ。

素人が、これ以上深入りしていいのか。

暮れの怪文書が、彼女に一層その思いを深く抱かせた。先月野木坂が言ったように、中途半端に手を引くのは危険かもしれない。だがしかし、このまま進む方がよほど危険ではなかろうか。いずれの道を採るべきか、未だ中２の彼女にとっては、重すぎる選択かもしれなかった。彼女が選び得る最良の選択は、すぐに身を隠す事ができるように、身辺整理をしておくぐらいであった。

苦悩していたのはもう一人、坂井法子である。彼女の頭では雪風と二式大艇、初雁、榛名とはるなが渦を巻いて彼女の神経にまとわり付いていた。榛名とはるなは過去を背負い、初雁は何か大きな使命を受け、そして雪風と二式大艇にはその過去と使命の「鍵」が有る。自分はなぜ彼らとかかわりあう事になったのだろう？やはりバグ？バグで片付けられたのではたまらない。それならば何故？一体私は何なのだろう？何としてでも確認したかったが、秘密を握る榛名達は「艦隊派」の者達は二月早々に帰省してしまった。....宇垣は？

ある時彼女は宇垣に会いに、日が暮れてから寮の私室に行ってみた。気のせいだろうか、彼女は少しやつれてみえるようになってきた。

「元気そうですね」嘘も方便、とりあえず挨拶代わりに言ってみた。

「別に無理しなくてもいいぜ」宇垣の声にも、やはり力が感じられなくなってきている。

「ここんとこ体重は減る一方だ。そんなに派手にじゃないが....前は60kgはあった。それが今じゃ50kgだ。ようやく止まり加減だが.....こりゃそろそろ死ぬかもなあ」

「まさか」艦隊派はなぜこんなに「死」に無頓着なのか。坂井は考え込まずにいられなかった。

「まあな。まだバラ色の学生生活を味わってねえんだ。今お迎えが来って、一発ぶちかましてお引き取り願うつもりだが....今日はどうした」

彼女はすぐ用件を切り出した。自分は何なのか？

「雪風の関係か」宇垣は聞き返した。「そうさな、俺には判らんが....まあ何だ、何かの引き金を持つ御姫様ってとこかね」

「本当は知っているんじゃありませんか？」

「おいおい、買いかぶるなよ」宇垣は手をひらひらさせた。「俺はただの、榛名の用心棒だっただけだぜ。今じゃただの木偶さね。勇気の木刀？あれだって御飾りさ、あの雪風が何を秘めて、何の意味を持っているのか、俺にはついに判らなかった。....今度初雁についてって、その気になって中を探してみれば、あるいは何か出るかもな」

「？」

「あの船は、不思議な船だ....」宇垣は遠い目になった。「何も無いと思って行くと、何もでてきやしない。逆に何か有りそうだと思って行くと、すごい発見が有るんだ」

結局自分は何なのだろう。その答は得られなかった。ただ一つ判ったのは宇垣には以前の輝きが見られなくなっている事だ。それが「木刀」を失った事からか、それとも「怪我」のためか、どちらかは判らなかったが。

さらに坂井は、もう一つの事でも悩まされる事になった。同室の初雁の歯ぎしりが始まったのだ。おまけに日によってはうわ言まで出る始末。

そして毎日のように彼女は悲鳴を上げて飛び起き、坂井をびっくりさせるのだ。

めずらしく早く寝付けたと思ったある晩。

気が付くと、彼女はどこか研究所らしい建物の仲にいた。研究所といっても、何か薬品臭さがある程度で、確証はない。

廊下に並ぶ中で、一番小さな、しかし目立つ扉を彼女は開けてみた。鍵はかかっていなかった。が、そこは警備室だったらしい。拳銃を持った男達が、即座に反応して、戸口に押し寄せた。慌てて逃げ出す。

彼らは古臭いデザインの軍服を来ていた。あれって、陸軍？何で？

一番頑丈そうな鉄の扉を見付けて、飛び込む。また鍵は架かっていなかったが....あまりの光景に、彼女は立ち止まった。

人間の、脳。

それが瓶詰めになって、たくさん有る棚に全てぎっしり並べられている。ひんやりした空気が足元を洗う。吐き気が容赦なく込み上げる。背後で兵隊が銃を構えるのにも気付かず、彼女は戻し始めた。

ど....

「ぐつぎやあああああああああああ

ああああああつつつつつつつ!!!!」
....てっ。

坂井は気が付くと、自分のベッドからまっ逆さまに落ちていた。横では初雁が上体を起こし、肩を抱えている。荒く息をしながら、うわ言のように繰り返すのはいつもと同じ、「パンドラの小箱....」。
「ちょっと、ええかげんにして！」今日という今日は。坂井は腰に手を当てて初雁を見下ろした。....のどが嗄れているような気がするのは何故だろう？「毎晩毎晩毎晩毎晩、何なんよ一体！起こされるこっちの身にもなってや！」
「....ごめん」初雁は上目使いに彼女を見上げた。「どうも最近、疲れてるみたいで」
「何かやな夢でも見たって？」
初雁は小さくうなずいた。
「嫌な夢....キノコ雲....」
自分は駆逐艦を駆り、何か大きな船を護っていたのだが、大きな船が突然キノコ雲に包まれ、その発する光に自分も巻き込まれて、生きながらに焼かれていく....
それからは毎晩のように二人ともそれぞれ同じ夢にうなされ始め、仲良く同時に飛びおきるようになった。

若宮奈波は呑気に学校の事務用システムにハッキングをかましていた。ハード的な接続ポイントなら、相応の智識が有れば、あとはその気になって探せば比較的容易に見つけだせるものだ。しかしソフトのセキュリティはそう易々とは行かない。彼女も腕に自信はある方だったが、他の数少ない「同業者」同様、事務の強力なセキュリティに探索の手を阻まれていた。個人情報ファイルは、比較的簡単に発見することができた。ずいぶん古いデータベースソフトをそのまま使っているようだ。しかし、中身がどうしてものぞけない。パスワードがわからないのである。
これは駄目か。彼女はシステムとその後半月ほど格闘していたが、あきらめざるを得なかった。

その晩野木坂は、物陰から、如月の部屋の入り口をうかがっていた。扉の上にはテレビのリモコン大の小箱が据え付けられ、箱からはバカみたいに長いリード線が壁に沿って延々と伸ばされている。１０ｍはあるだろうか。
やがて、如月が帰ってきた。彼女は「小箱」には全く気付かなかったようで、何の反応も見せずにそそくさと入っていってしまった。野木坂はポケットのトランジスタラジオをオンにした。「小箱」はＡＭ波を使った盗聴機だったのだ。電波の都合で異常に長いアンテナを必要とするが、ほとんどシャレのつもりだったから、別に気にしなかった。彼女は前回の「ガサ入れ」の失敗以来、目標を失っていた。ごっそり作った「小型」の盗聴機さえ、正熊にそっくり譲ってしまっていたのだ。
ラジオから流れてきたのは、ただのモダチョキだった。
翌日、如月は入試の為に帰省した。部屋にはチリ一つ残されていなかった。

菅原は初雁の案内で、夕方の女子部へ有明みどりに会いに行った。彼と初雁は少くとも女子部ではほぼ公認で（初雁は否定しているが）、彼が女子部で彼女と一緒にいる事はもはや当たり前になってしまっている。
彼が知る範囲で最も電子系に近いとなると、有明がダントツだ。彼は単刀直入に切り出そうとしたがやはり話が大きくなる事を嫌い、肝心の雪風の部分は伏せることにした。
「先輩を送るんで、花火をあげたいんだな」
彼は辺りをはばかりながら言った。
「あとは火花だけなんだけど」
「信管ね」有明は得心したような顔になった。
「それで、種類は？リモートケーブル？無線？時限式なんかお好み？」
いきなり時限式信管などが飛び出したので、菅原は心臓が止まる思いになった。バレたか？初雁が目配せして後を続ける。
「そうねえ。時限式がいいかしら。12時間ぐらい取れるやつ。でっかい花火だから、それ相応にね。あとはちゃんと弾ける事....」
「誰に言ってるんです？信頼性ならこの有明電子・ケー・ケーが請け負いますよ。で、量はどの位ですか？」
「12.5㎝砲弾が50発くらい、それに酸素魚雷が8本、あとは機銃弾が山ほど、カナ」
今度こそ菅原は卒倒しかけた。が、すんでのところで取り直したのは、有明が事態を把握していないと判ったからだ。
「わかりましたけど、今の例え、ちょっと苦しくないですか。打ち上げがたくさんですよね。クラッカーぐらい自分で鳴らして下さいよ、まだ恐いんですか？」
またかよ、といった体で、有明はさらりと受け流したのだ。卒業式には間に合わせる、と彼女は確約した。

始めは「ハッキング」の片手間にやっていた「例の洞窟」のマッピングだったが、日増しにそちらの方の比重が上がったのは仕方が無い事だった。本来なら建築用のCADソフトまで使って精密にやりたいところだったが、

しょせん学生の財力では叶う筈もなく、ごく普通の3Dドローソフトで我慢せざるをえなかった。が、大体の事は把握できるようになった。しかし導き出された洞窟の全容は、驚くべき「ダンジョン」だった。若宮が自分で実際に動きながらずいぶん丹念に計測しながらグラフ用紙にマッピングし、その成果を書き込んでいった結果だが、絶対に有り得ないような立体交差がそこかしこに発生し、また、「絶対に無かった」と断言できるような場所に十字路が形成されていたりもしている。彼女は一つ答えが閃いていたのだが、信じたくはなかった。

ターンテーブル。*1

有ってはならない事だった。「ウィザードリィ」ならわかる。しかしここは現実の世界だし、床が動いたような感覚はなかった。岩肌が擦れるような音もしてしかるべきだし、第一継ぎ目が見えるはずだ。自分が持っていっているのはろうそくや松明のような頼りない光源ではなく、かなり大きめの携帯電燈だ。見えないはずが無い。まさかと思いながらも、幾つかその要素を含めてマッピングし直してみた。するとどうだろう。

以前よりはよほどすっきりしたマップが出来上がったのである。

自分の感覚を信じるべきか。それとも「仮説」を採るべきか。彼女は頭を抱え込んだ。

菅原は「もう一つの雪風会」の存在を知って以来、雪風の「安否」と「介惜」により一層の注意を払うようになった。初雁以下他の者は彼の計画にあまり乗り気ではなかった。これがもとでせっかくうまく行きかけていた初雁との仲は微妙な瀬戸際に有るし、それはさておき、あまりあからさまな準備は自分の身を非常に危うくしかねない。既に弾薬の配置状況などは彼の頭に刻みこまれ、兵装関係に限って言えば、今までと逆に初雁に教えるほどになっていた。後は時限装置を用意して、計画を実行するまでだ。

そんなある日の事である。まったく偶然にではあったが、菅原達3人が雪風の洞窟に勢揃いした。いつものように菅原が洞窟にやって来ると、既に初雁が艦を外から陶然と眺めていて、何となく「本物の質感」について雑談していると久しぶりにアーティミス・ヴァンガードが姿を見せた具合である。

「大掃除にはちょっと遅いよね ....」

そう言って、初雁が頭に三角巾を巻いてタラップを上がろうとした瞬間に艦橋に現れた影を、まだ下にいた菅原は見逃さなかった。

「誰かいるぞ、艦橋だ！」

叫ぶなり彼は初雁を押し退け、急なラッタルも二段飛ばしで一気に駆け上がった。勢いで甲板が小刻みに震える。二人はよく飲み込めないまま後を追う。

「榛名ノ言ッテタ人カナ？」

アーティが呟くが、英語だった事も有って二人には分からなかった。

朝比奈美雪は自我を喪失していた。今さっきまで、私は弓道部室に居たはずだ。夜の練習が済んで、シャワーをみんなよりゆっくり浴びて、私服になって、それから ....? 部室を出ると、そこは船の中だった。それも本物の。友達の DM 船みたいな、意外とあっさりしてるのではなく、そこかしこにパイプが這ってて、全部金属でできてる .... で、何か書いてあると思うと旧カナづかいで、旧漢字で、読めない。慌てて引き返そうとドアを戻ると、部室ではなく艦橋の外に出てしまった。上は岩盤で覆われている。洞窟の中らしい。

こういうの、木曜スペシャルの稲川淳二とかがよくやってるよね。*2

そうは思うのだが、あまりに突飛すぎて実感が湧かない。何となくそうやっていれば、いつかは元に戻れるような気がして、同じドアを出たり入ったりしていた。だが、希望は裏切られ続けた。帰れるかな？夢かな、と疑う前にそちらの方が心配になる。

やがて、どやどやとした足音とともに人が現れた。

「助かった！」彼女は呟いた。「帰れるわ」

不思議と菅原は、人影が「雪風」だとは思わなかった。その一方で、雪風が自分を招いているのも感じていた。そして不思議な事に、「影」が敵だとは、少しも疑わなかった。だから、相手の第一声を聞いた時も、警戒するというよりは、呆気に取られたと言った方が近かった。

「帰れる？」彼は聞き返した。「どこへ？」

少し遅れて飛び込んだ初雁とアーティは、艦橋へ飛び込むが早いか懐の拳銃を構えていた。 .... が、初雁はあさっての方向をポイントしていた。慌てて向きを直す ... が、すぐにまた、別の方に向けた。始めはその勢いと目まぐるしさに朝比奈と菅原があんぐりとなったが、自分が改めて狙い直したものの正体

---

*1 実際これにハマるとうんざりする。これが出るようなフロアはデュマピックかマロール及びそれらの互換品は必須

*2 筆者が実はアアンだったりするんだ、これが

を知った初雁とアーティも、やがて口を開ける事になった。

「ほ .... え .... っ？」
「 Jesus....! 」

朝比奈の背後、つまり菅原達が入った反対側の入り口から現れたのは、足のあたりが霞んでいる .... 即ち、幽霊。菅原はその姿に見覚えが有った。甲冑姿は忘れようがない。

「雪風さん、これは一体どういう事ですか」菅原は言った。「この人はどうして、どうやってここに？」
「彼女 .... 朝比奈美雪も後継者の一人なのです」
「し .... しっつもーん」初雁が、崩壊しつつある自我と戦いながら、手を挙げる。「あなたは、だあれ？」
一瞬の間。幽霊は一同を見渡すと、ゆっくりと話し始めた。
「私はこの雪風の船霊です。先代の艦長、栗田榛名が言っていた数珠のお告げとは、実は私の事なのです」
緊張の糸がぷっつりと切れてしまった初雁は、最後まで聞かずにそのままばったりとのびてしまった。わずかに雪風が失笑したのを、初雁を支えながら菅原は見逃さなかった。
「榛名と一緒ですね .... 彼女も始めのうちは、ひどくびっくりしていましたよ」
すぐに彼女は朝比奈の方を見た。
「朝比奈さん、あなたは警策を持っているはずです」
いきなりの事で朝比奈は面食らったが、ややあって、春日の遺品を片付けていた時のあれだと気が付いた。雪風がうなずく。
「あの時あなたは、何の違和感もなくあの警策を自分の物として受け入れた筈です .... それこそ、あなたが春日千明の後継者だった事を意味します」
「 Shat up! 」
アーティミスがいきなり銃を構え直した。気のせいか、顔が紅潮してみえる。
「デハ、ちぃちゃんガ死ンダノハ？宇垣サンガ撃タレタノハ？扶桑サンモ殺サレカケタ。Why? 」
「いつの時代にも、番狂わせの裏切り者はいるものです」雪風は銃口にまったく動じなかった。「銃をお下げなさい。もう大昔の事ですが、弾の雨降る太平洋を何度も渡ってきた私には、その程度の脅し、何も感じられないのですよ」
アーティは不承不承ガバメントを下ろす。
「今回の場合は、如月まどかがそうでした」
雪風の口調には、深い憂いが込められていた。
「今にして思えば私も迂闊でした。何の資格もない彼女を信用してしまったのですから」
彼女によれば、如月が初めて雪風を発見したのはもう５年は昔、つまり如月が未だ中学二年だった頃の話だという。
「その頃から彼女は、他の生徒達とは違う空気を備えていました」
彼女は雪風の船神であると同時に、戦後ずっとこの真鶴の土地神でもあった。この洞窟に引き入れられてから一世紀近くにわたり、真鶴岬を見守り続けてきたのだ。
「彼女は人間達よりは、 .... むしろ私達に近い .... 今でもそう感じられます」
つまり彼女は幽霊なのか。アーティは確かめたが、雪風は否定も肯定もしなかった。

「私にはその様な感じがする、というだけです。確証は有りません」

彼女はそれから、如月について語り始めた。彼女は実に不思議な人物で、正当な後継者である榛名達でさえ始めは洞窟に着いた時点でだいぶバテていたというのに、何故か元気はつらつとしていたこと。何かの拍子にちょっと紛れ込んだのならそれも解らないではないが、明らかに彼女は何等かの目的を持ち、相応の準備を整えてやってきていた。本能的に危険を感じるので、今に至るまで如月の前に出た事はないらしい。そして如月は、艦内に隠された「ある物」を求めて、注意深く探りまわっている。

雪風は菅原に告げた。
「あなたも気付いている通り、この洞窟と外の世界を隔てるものは今見える岩盤以外に有りません。確かにここへ至る通路にはいくつかの仕掛けが有り、資格のない者を惑わせるようになってはいますが、実は今までここへ紛れ込んだのは、一人や二人ではないのです。つい半月前にも３人組が現れています。結界がどうこうなどと、いずれわかるような嘘を栗田がついたのは、恐らくあなた方が軽々しく他の人に私の存在を公にする可能性を捨てきれなかったからでしょう。いずれにせよ私は白日にさらされる運命です .... そして、残された時間はそう多くなさそうです。今さらこの老体を見世物のようにするなど、どうすれば耐えられましょうか ....。菅さんに今一度お願いします。一思いに私を楽にして下さい。あなたがたにできるやり方で構わないのです。それから」
雪風はアーティに目をやった。
「扶桑和子が殺されかけたというのは、知りませんでした。私はこの真鶴周辺の事しか知り得ないのです。ですが宇垣麻美を撃ったのも、春日千明を撃ったのも、間違いなく如月

まどかです。私は弾を外らせようとしましたが、力が何かに阻まれてできませんでした」
アーティが白人特有の、ニヤリとした笑みを浮かべる。
「ナゼ扶桑さんの事を知っているノ？彼女はここに関係が無いはず」
「いいえ」雪風は否定した。「彼女の父上は榛名の二代前に、この雪風の面倒を見て下さっていた方です。関係が無いどころの話ではありません」
「新事実」に仰天しつつも、初雁を抱きかかえたままの菅原が尋ねる。
「あなたの秘密とは、一体何なのですか？」
その瞬間雪風が微笑したように菅原には思えた。
「艦長私室のロッカーの中をご覧下さい。当節ならばれんたいんと言うのですか、菅原様への贈り物がございます」

そしてまた、一同を見渡し、呟いた。
「私はこの世の者ではありません。ですが、心はあなた方に極めて近い ....」

この間の夢と同じように、雪風の影は気が付いたら消えていた。まだ警戒しながら朝比奈が聞く。
「今 .... 何時ですか？」
「１０時３０分 ....」外の電燈からさしこむ薄明りに腕時計をかざして、アーティがニッコリと答えた。「今から帰れば、消灯時間には間に合うネ」
「プレゼントは明日取りに来よう」アーティにではなく、天井の隅の方に向かって、菅原は答えた。

軽音部。結局、４人でやる事になった。榊裕がボーカル、E.光次郎がギター、沖田がドラム、桐野薫がキーボードで、他に必要に応じて音楽部からバックコーラスを回してもらう形を採る。加藤先生もバックコーラスについては了承して、演目の練習に入った。卒業式まではあと一ヶ月余りしかない。しかも期末試験が有るから目一杯はできない。全員、焦りの色は隠せなかった。
「あの駆逐艦を知る者」E.光次郎はそれ程不審な行動も見せなかった。榊はしばらく起きてから寝るまで、部活を口実にできるだけ光次郎に付きまとったが、彼はうるさそうにするでもなく、特有の明るさでつきあっていた。
桐野は日曜日に朝から洞窟に行った。榊も一緒だ。今回榊は「悪霊退散グッズ」としてお札お守り十字架ニンニクドリンクその他諸々を携え、桐野は部の備品のポラロイドも持っていった。写真がおかしな事になったのは紛失か、あるいは盗難だと思ったから、今度はそういった「危険な過程」を経ない、もっと確実な方法をとろうとしたのだ。
それ以前に若宮と会って、「おかしな写真」を見せてみたが、彼女にも見覚えがなかった。何か後味の悪さを予感させる「事件」だ。
再び山のマンホールから彼らは突入した。今度はよく注意した事もあって、落とし穴には落ちなかった。その代わり鬼のような時間がかかった。いいかげん嫌になった頃、ようやく二人は見覚えの有る洞窟に出た。駆逐艦は前と同じ状態だ。彼はまず一枚撮った。すぐに印画紙が吐き出される。彼らはしばらく、待った。
驚くべき物が写っていた。
今、自分の目の前に有るのは無人の軍艦と洞窟だ。しかし写っているのは、喧騒に満ちあふれている。出港間近だろうか。二人は顔を見合わせた。
「心霊写真 ....」
「だったら"投稿写真"とかに送り付けて一儲けできるだろ！」
あくまで心霊写真説は信じない、信じたくない桐野は、決然と艦内に入っていった。不承不承榊も続く。小一時間ほど艦内を探索して回った二人は、嫌が上にも一つの事実を知った。艦内は異常によく整えられているのだ。チリ一つ無いといってはオーバーだが。この船の古さから考えて、放置されていたのならこうはなっていないはずだから、つまり、この船には定期的に、それもかなり短い周期で人の手が入っている事になる。
誰が、何のために？
この疑問はしばらく彼らを捉えて放さなかった。
この船が「雪風」という名である事は、どこかで見つけた銘板で判った。後でその事を聞いた若宮はひどく疲れたような顔になったが、彼らにその理由は判らなかった。

昼過ぎに彼らが帰ろうとした時、天井から足音がした。誰かいる。
「会ってみよーや」
榊が言い出して、さっさと上へ上がった。
二人はそこで見たものに、「ああ、やっぱり」としか思わなかった。
E.光次郎が居たのである。むしろ意外だったのは光次郎の方だったろう。
「ハイ」彼はどこかぎこちなく右手を上げた。
「久しぶりだネ」
「一体どういう事だ」桐野は詰問した。「いつからこんな .... それにその３人は」
彼は光次郎の横にいる３人の生徒に目をやった。みんなそれぞれに気まずそうな表情になっている。男子一人、女子二人。もし正しければ、男の方は見覚えが有る。朝礼で時々

舞台に立つから、生徒会員でそれなりの地位なのかもしれない。もっともただの週番班長かもしれない。
「これは僕等の船なんだ」光次郎は言った。「正確にはこの、こだまの船なんだけどネ」
「こだま？」榊が聞く。「誰だい」
「そう言えば紹介がまだだネ」彼は肩をすくめた。「この二人は僕と軽音班で一緒の、キリノ君とサカキ君だ。さて、こちらが白根こだまだよ」
名前を呼ばれて、一同で一番小柄な子が軽く会釈した。よくよく見ると風紀委員会の記章が胸に付いている。桐野達は瞬間やばい！と身構えたが、すぐに彼らも同罪だと気が付いた。いざとなったら取り引きに持ち込もう。
白根こだまは光次郎の肩ぐらいまでしか身長がなくて、他が大きめだけに余計小さく見える。小さな細縁の眼鏡をしていて、そのままでも理知的そうな顔立ちをいっそう切れ者らしく見せる効果があった。
竜野了は少林寺拳法同好会（男子）の会長だという。生徒会員ではなかった。高 2A で、まあごく普通の体育会系かな、といった感じだ。人当たりは良さそうだ。
加越京子は文芸部の部長で 90 式戦車の班をまとめる立場に有るそうだ。プチ宇垣のような風にも見えて、どうしても文芸部の部長とは思えない。とは言え宇垣も交通研の次期部長だし、どうも真鶴にはこの手のミスマッチが多いようだ。....高 1A と言えば、「榛名 jr.」こと初雁つばめがいるクラスだ。同級生でこんな船を持ってるのがいると知ったら、きっと初雁先輩はよだれを足らして仲間に入りたがるだろう。榊は何とはなしにそんな気がした。
「僕等が知り合ったのは本当に偶然なんだ。大したことじゃない。まあ、交通事故みたいなもんだネ」光次郎は少しきざに振り返り、白根たちにウインクして見せた。「こだまがこの洞窟の地図を見つけてきたのはもう半年ぐらい前かな。風紀委員会の部屋で捨ててあったのを、勝手にもらったらしいんだよ」
「D&D[*1]のサプリメントみたいだったから」
白根が補足する。風紀委員も D&D なんかするのか。普段あれほど教室でやってるのを取り締まってるくせに。二人は少し意外さを覚えた。
「ところが、京子が体育館裏でこれに書いてあるのと同じ入り口を見つけた。入ってみたらこういう事だったんだね。僕等も驚いたよ」
「ちょっと地図を見せてくれないか」
桐野は、白根の OK も待たずに彼女の手から地図をひったくった。若宮がマッピングしていたのを知っていたからでもある。そこに描かれた「正解」は、若宮のそれとは似ても似つかぬ、すっきりしたものだった。
「僕等は前に、山の上から入って、同じ道を戻ったら下水道に出た」
榊が横からのぞきこみながら 4 人に言う。
「トラップだわ」白根がすぐに気付いた。「私達もこの通りマップは持ってるんだけど、やっぱり同じ。この地図、入る時は良くても、出る時は全然役に立たないのよ。今日は部室棟予定地の裏の防空壕から入ったけど、どこに出るやら」
「こないだは登校時間に間に合わなくて冷や汗もんだったよ」加越がぞんざいに言い放つ。「それからは 30 分は余裕見て出るようにしてる」
「この地図、借りていいか」光次郎に桐野は言った。「見せたい奴がいる」
「そりゃだめだ」竜野が言下に断る。「できれば僕らは、この船を秘密にしておきたい。大事にしておきたいんだ」
二人にも、その気持ちは判らないでもなかった。しかしそこで思い出した事が一つ。
桐野は、さっきの心霊ポラロイドを取り出した。一同の顔がさっと青ざめる。
「心当たりはないか？」
「いや....」光次郎の声は少し上ずっていた。「初めてだ....写真を撮った事はないから....unbelievable....」
幽霊の謎は残されたままになった。だが彼らはそれから直ちに下船してそれぞれに船に手を合わせ、光次郎だけは十字を切り、洞窟を出た。

その日彼らが出たのは女子部の体育館裏だった。

三度若宮。気分転換のため、また軽音の二人のためにも、彼女はあの「駆逐艦」の特定に移った。大体の特徴はメモった....はずだったが、これも早々に頓挫した。戦艦のように大きな船ならともかく、駆逐艦程度の小さな船では差もわずかで、似たような船はごまんと有ったのだ。まだ日本艦でよかった。これが米艦だったら目もあてられなかっただろう。
それでもいちおう大雑把な特徴から、「吹雪型」「吹雪型改」「特型Ⅰ」「特型Ⅱ」「特型Ⅲ」「初春型」「白露型」「朝潮型」「陽炎型」「夕雲型」のどれかだとまでは判った。全部で１１２隻だ。実は「吹雪型＝特型」でダブりが有るのだが、[*2]そんなこと

[*1] この時代にも D&D は有ったりする....（笑）
[*2] 実際は 88 隻

まで「普通の」女子高生が知る由も無い。また、よく読んでみるとこれらの船はほとんどが第二次大戦で沈み、残りもまともな状態だったのはただ一隻「陽炎型」の「雪風」以外なく、その「雪風」は戦後台湾に引き渡されたため、結局日本には一隻も残っていないはずなのだ。栗田榛名先輩ならどういう事か判るかと思ったが、既に彼女は受験で帰省した後だった。他に心当たりでわかりそうな人物はいない。

後日軽音の二人から、あの駆逐艦が「雪風」であることを告げられると、若宮はどっと疲れが押し寄せるのを感じたものだった。

雪風のプレゼントはすぐに見つかった。

艦長私室の場所は初雁が案内したので迷う事はなかった。菅原は弾薬庫関係には詳しくなったが、こういった生活スペースについては未だ若葉マークに等しい。ロッカーは艦長用だけあってさすがにいくつか有ったが、事実上は一つだけだった。それだけ鍵が開いていたのだ。雪風の親切に、菅原は心底感謝した。もしダイヤルロックがかけられたままだったら、彼らは一日ふいにした格好になる。

問題の「プレゼント」は、地図や図面を入れるような円筒形の皮張りの容器で、針金と鉛で封印されていた。

「そんなこともあろうかと」初雁はポケットからニッパーを取り出した。「有明から借りてきた」

「信管が遅れないか？」彼は心配になった。

「大丈夫、あれは今日秋葉原に部品買いに行ったし」彼女は目配せしながら手際よく針金を切っていった。「似たようなの一杯持ってるからね。 .... 開けるのくらいは自分で」

初雁は筒を菅原に渡し、更に続けた。

「有明の道具箱はすごいよ。ボストンバッグくらい有ってさ、 30 kgはあるかね、*1一度持ったら腰が抜けるかと思ったよ」

彼は中をのぞくと、甲板に出た。広々とした床にきれいに巻かれて形が付いてしまった図面を広げる。アーティが端を押さえて手伝った。

「 .... これは！」

一目見ただけで、初雁は絶句した。よく要領を得ない菅原とアーティ、そして朝比奈が初雁の方を見る。彼女は緊張した面持ちで辺りを見回した。

「すぐにしまって !.... ここじゃまずい、艦長室へ !!」

彼女の語気に押され、彼らは大急ぎで書類を畳み、駆け足で艦長室に戻った。

「パンドラの小箱 ....」初雁はよろよろとベッドに腰掛け、頭を抱えた。「ようやく意味がつながった ....」

「どういう事だ」菅原は彼女と向かい合う形で、床に腰を下ろした。鋼の甲板はさすがに冷たい。「あの図面は何の ....」

「原爆」

初雁はただ一言呟き、床を見つめて腕組みした。アーティと朝比奈が絶句する。

「まさか」菅原は反論した。「まさか .... そんな、そんな技術が日本に有ったなんて」

「ごく偏った形が許されるなら、戦前の日本も西洋に優るとも劣らない技術大国だったわ」初雁は呟くように答えた。「飛行機、船舶、鉄道 .... それにテレビもそうだった。戦争がなければ ....1944 年の東京オリンピックで NHK が世界初のテレビ放送をやっていた」

「まさか！」アーティが意外そうになる。「あれはイギリスが ....」

「結局はね」初雁は苦笑した。「当時の軍部は、直接戦争に役立つ技術以外は、研究する事も含めてすべて禁止してしまった。テレビもそう .... でも、まさか原爆を理論上だけでも完成させていたなんて、私だって信じられない、いえ、信じたくない ....」

菅原は、しかし、それで勅使河原達がこの船を探していた訳が判った。原爆。世のテロリスト達が喉から手が出るほど欲しがる、究極の恐怖兵器だ。勅使河原達がそれを握ってしまえば、彼らは自ら原爆を作成しなくても、文字通り「その筋」のトップたりうる存在となる。「情報」を餌にしてしたい放題暴れる事が可能になるだろう。

「この図面は」菅原は全員を見渡して、決断した。「この図面は、"その時"が来たら、弾薬庫に置こう。それまではこの中に戻しておこう」

誰も反対しなかった。それどころか初雁は、今までとは打って変わって雪風の爆破計画に積極的にさえなった。

坂井はその日から初雁の悲鳴に起こされる事はなくなった。相変わらず自分は悲鳴とともに飛び起きる毎晩だったが .... 悪夢ってどうすれば見ないで済むようになるんだろう？初雁は聞かれても「さあ ....」としか言わない。うなされている訳ではないのに、前よりもずっとやつれたような気もする。

二月中旬、いつからという訳でもなく、突然部室棟の工事が始まった。とは言ってもまずは地質調査のためのボーリングとなる。この付近は火山帯が走っている事もあり、地震対策の必要から建築工事の前には必須の作業

*1 冗談抜きで家の道具箱は両手でもよろめくほど重い

だ。*1が、このために持ち込まれた機材が素人目にも過剰だった。できあがるのは学校側の発表によれば鉄筋地上２階建のごくありふれた建物だ。しかしボーリング機材や、ようやく揃い始めたその他建築機材は、どれももっと大きな、例えば小田原駅前のデパート*2も作れるような、大掛かりな代物ばかりだった。もっともほとんどの生徒達は「そんなもんかな」程度に考えて、「だから受験生が少なくなる今まで工事を控えたのだ」と受け取った。しかし、初雁の見解は違った。

「ありゃあ、何か裏が有るね。*3それが何かはわからないけど .... 意外とこれ引き上げるつもりだったりね。邪魔になる提督先輩達が居なくなるのを待ってたんじゃないかな。.. .. だけどそうは問屋がおろさなかったってとこかね？」

雪風の艦上で、彼女は菅原に冗談交じりにそう言ったものだった。冗談で済まないのは菅原絵馬である。彼個人ではこの雪風は学校の真下だと確信しているし、一見ちょっと堅そうな天然の岩盤以外は遮るものはないとの結論は既に出されている。下手なボーリングで爆破前に発見されでもしたら、一大事だ。第一、爆破で余計な死人が出でもしたら、あからさまにまずい。

問題は .... 工事の物と思しき地鳴りが雪風のほぼ直上からするようになった事だ。

残された時間は、あと少しだろう。

(To be continued....)

校長室（前半分）

くどいようですが念のため。私は戦争賛美者では決してありません。戦争のせいでパーになった物事が惜しむには多すぎるほどありますから .... かと言ってそこらの非戦論者と一緒にされても困るので要注意。戦争のおかげで（？）戦前よりずっと良くなった事も確かに有るには有るからです。「良くなった事」のうち幾つかは、日本がアメリカに負けない限り起こり得なかったはずです。そうでもしないと日本は変わらない、というのは悲しむべき事実で、今後我々は「いかに自他共に血を流さず」より良くなっていくかを考える必要が有るでしょう。この点私は一言に限らず言いたい事が有るのですが、それはまたの機会に。

今回は「パンドラの小箱」がキーワード。特に意味はないけど。

次は２月後半です。ちなみに、高３生は宇垣麻美以外一人も居ませんし、３月になるまで帰ってきません。全員揃うのはそれこそ卒業式（３月半ば）の前日でしょう。雪風篇も次回で終わりです。その後は長い「エピローグ」に入ります。「それからどうする」は皆さんに一旦委ねます。自キャラらしい行動を考えておいて下さい。あと７回 .... もう自棄です、なるようになれってとこですか。

また各自「プレイヤーの知識」「キャラクターの知識」の区別にはよく注意して下さい。例えばまだ「雪風会」と「もうひとつの雪風会」の三者の間では「雪風」というつながりは有るものの、互いにそれぞれとの面識はありません。したがって、情報の共有は有り得ません。今回はこの点で若宮奈波さんの「雪風爆破計画のための地質調査」はボツにしました。何か独自の考えがあっての事なら、そこまで一言欲しかった。ちなみに桐野薫君のフラッシュを弁償した時点で実在がほぼ証明されているので、彼女の「幽霊のふり」は不可能、と言うか無意味になっています。今回は艦形識別の話も有りましたが、普通の高校生にそんなことを期待してはいけません。自分でも多分経験が有るでしょう、普通は駆逐艦を駆逐艦とわかるだけでも「おたく」のレッテルを貼られるほど、今の人たちは無知です。その点はこの真鶴でもあまり変わりません。だから若宮さんがあそこまで絞りこめたのも、実はこちらとしては大サービスのつもりだったりします。(^_-)ところで、榊君に質問。「蛍の光　島唄」って、どんなのですか？

さて、では後半へ続く前にちょっと一服。(^^ゞ

---

*1思いもがけずタイムリーになってしまいました。近辺の人大丈夫だった？

*2確か小田急だったと思うけど、よく覚えてないのでぼかしときます

*3ほぼ栗田艦隊の口癖になってますね

四誌連動企画

復活の笠原電脳診療所

担当：女医　笠原和子

イヤー、参りましたよ、ホント。年末年始に打ち込みのバイト入っちゃうし、バイトが終わったと思ったら息もつかせずすぐ期末試験でしょ、もう原稿打つ暇なかったんですよ。アラベスクは今回がラストだったんですよね。じ・つ・は、アラベスク #2にも参加しちゃいます★キャラはまだどうするか決めてないけど。社長はクレギオンしかやらないそうです。私は逆に、クレギオンはやらない予定です。でもクレギオン関係の本にもこの原稿は送ります。皆さん見捨てないでね。(^_-)

さて、今月も外来患者さんは居ません。ページがむっちゃ空いてるんで、書きたい事書きたいように書けるのは良いんですけどね....

おはなし　その1　「マルチメディア」ってなあに？

この間東京の前田さんが本の上でこの事に触れてたし、京都の木村さんはそのちょっと前にお手紙で聞いてきてたりするんですよ、これが。実はこれ、ものすごーく嫌な質問です。木村さんの時はチョンボしてパスさせてもらったんですけど、二人目ともなるとそうも行かない。ええいままよ、いざ尋常に、勝負！

まず最初にハッキリさせときましょう、まだ「マルチメディア」って単語について、「本場」のはずのアメリカでさえ意味は固まっていないのです。いかにも知ってる風にベラベラ喋る人が居たら、それはよほどのペテン師か、「自分がその方針で開発に携わってる」人かのどちらかです。鵜呑みにしたら負けです。気を付けましょう。

さて、これだけでマルチメディアって単語はどこかへふっ飛んじゃったので、後は雑学。

CD-ROMが付いてるだけで「マルチメディア」をうたうハードが後を絶ちません。ソフトについても、CD-ROMに収録されてるだけで「マルチメディア」を名乗る物が腐るほど出回ってます。果たして「CD-ROM=マルチメディア」なのでしょうか。答えは、否です。でもCD-ROMとマルチメディアが密接なつながりに有るのは、事実です。グラフィック（絵）のデータは、キャラクタ（字）のデータよりも必然的に大きくなるからです。これはなぜかの説明に入りますが、その前に、コンピュータは全て「数字で処理をする」事を覚えておいて下さい。

キャラクタは一定の形を規定したパターンファイルを作っておいて、これに番号を振り（JISの4桁はワープロでもお馴染みですね）、データとしてはその番号を羅列すればいい事になっています。行・桁の位置は決まってますから、考えなくても構いません。ただずらずらと並べていけばいいのです。98なら半角文字で80桁25行、つまり一画面を表現するのに2,000個のデータを扱えば済みます。色はもちろん一色ですから、これも考える必要は有りません。

グラフィックは、形の規定のしようがありません。だから、「どこを塗り潰して」「そこには何番の色を塗る」という処理を、画面の1ドットごとにやっていく必要があります。98では普通400×640ドット、つまり256,000個のデータが必要です。グラフィックのデータが馬鹿でっかくなる訳はOKですか？

さて、そこでCD-ROMが1枚で2HDのフロッピーディスク450枚分の容量が有る事はご存じでしょうか。実際にここまで使いきったソフトは未だ有りませんが、フロッピー3枚以上になるとCD-ROMに収録した方が安上がりになるんだそうです。

マルチメディアは膨大なグラフィック処理の上に成り立っています。3D天然色グラフィックはそれこそデータが膨れ上がりますし、加えて音声です。いくらいいソフトでも、馬鹿でっかくて重くて高いソフトなんて買う気が起こりませんよね。それだけのデータを瞬時に処理できる強力なCPU、それだけのデータを収められる青天井な大容量記憶装置がマルチメディアの基本です。決して安い機械に使ってはいけないのが、これでお分かりでしょうか？

何か相手を煙に巻いて逃げてるような気がしてきたな、最後に私なりのマルチメディア観を。

テーブルトークRPGがそれにかなり近い存在ではないでしょうか。確かに一定の道は誰かに引かれています。しかし後戻り自在、寄り道自在、エンディングに行かなくたってかまやしない。それが真のマルチメディアだと、私は思ってます。エンディングの数が有限な物はマルチメディアじゃないのです。

おはなし　その２　フロッピーディスクのちょっといい話

さて、上みたいな話を見てしまうと、「もうフロッピーなんか要らないじゃん」と思ってしまいがちです。でもそんなこと有りません。フロッピーはこれからも無くなりません。人類が滅亡してもフロッピーは無くならない....ってのは別の話として、だって上でも書いたでしょ、文字のデータは小さいって。MS-DOSでいう「テキストファイル」（ホビデのマスター募集でお馴染みですよね）なんて、まさにその典型。あれはもう文字コードの羅列そのものですから、文庫本一冊分とかわざと巨大なファイルを作らない限り、フロッピーに収めてもまだ全然余裕です。それでも「無駄」は有るのでLHAとかで圧縮してみましょう。ひどいのになると1%まで（！）小さくなってしまいます。

それに2DDフロッピー。もはや2HDにすっかり主役を奪われてしまいましたが、実は2DDって「究極のフォーマット」だったりします。何たって、98-IBM-Macの全てで読み書き可能なんですから。嘘だと思ったら試して下さいな。合言葉は「720kB」ですよ！

おはなし　その３　圧縮のちょっといい話

前回ちょっとLHAについてお話が有りました。LHAに限らず、圧縮って、一度味しめちゃうと、癖になってどうにも止まりません。皆さんもゲームのコピーとかするでしょ？ほんとはしちゃいけないんだけど。そういう時って、大概10枚単位でディスクが増えちゃうんですよね。で、気が付くと山のようなディスクの仕舞い場所に困っちゃうって訳。それでなくても最近のゲームはディスクが多いし....。そこでLHAの登場です。MS-DOS用で、プロテクトの外れてる物なら、フロッピー一枚ごとに中身を全て一つのファイルとして圧縮してしまいましょう。ハードディスクにインストールできる物なら、ディレクトリごととか適当なサイズごとに何回か繰り返せばOK。こちらはプロテクトがかかったままでも、（つまりちゃんと買ったソフトでも）キーディスクをどうかしない限り何の問題も無いはずです。経験上、大体80%ぐらいになる事が判っていますが、「空軍大戦略」は何と1/3になってしまいました。

空技廠関係の皆さんへ

皆さんの募金と忍耐のおかげで、空前の赤貧をものともせず、社長が手持ちのノート（EPSON PC-386NAR2）の内部増設スロットを全て塞ぐ事に成功しました！＼(^o^)／

PC-386NAR2＋	性能要目
CPU	AMD 386SX/25MHz + Cyrix Cx83S87 *1
RAM	1.6MB + 8MB *2
HDD	None + 200MB *3

以上で「第一次大改装」は完了です。「ニュートン物理学実験」に伴う修理代も込みで、150,000円かかりました。素直に98NS/R *4買って、メモリ満杯に付けても大して変わらない額ですよ、これって。やれやれ。社長は早くも「第二次大改装」を計画してて、Cx486 *5を積んで、大容量バッテリを付けるんだって張り切ってるけど、はっきり言ってそこまでやるんなら素直に新しいの買った方がいいと思います。

お・知・ら・せ。

このコーナーへのお便りは、以下の住所か、この本の編集さんのところまで。

〒222　横浜市港北区菊名2-27-32　　菊地 研一郎 様方
「横浜空技廠」　電算機研究部

---

*1コプロセッサ。CPUの仕事の内、計算処理の部分だけ横取りして、システムの負担を軽くする。
*2 4MB ×2。本体の制限いっぱい。
*3ニュートン物理学実験の時に、120MBのHDDが名誉の戦死を遂げていたりします。
*4標準状態で一充電あたり8時間も動作する凶悪なノートパソコン。既に過去の物になりつつあるが、一応486機だし、現在ここまで持久力の有る機種も無いのでお薦めの一台。
*5286/386機を3万円程度で486機に化けさせてくれる魔法のチップ。これの登場を涙を流して歓迎したユーザーはどれだけ居るか判らない。ただしそれなりに危ない橋を渡ってもいて、使いこなすにはかなりの勘とテクニックが必要。最近では素直に486機を買った方が早くて安い事もまま有ったりする。

真鶴学園風雲録　後半

2月も20日過ぎになってから、雪風の洞窟に入った菅原絵馬は、腰を抜かさんばかりに驚く羽目になった。とうとうボーリング・ドリルが洞窟に到達したのである。もっとも雪風の船体をぶち抜くのは、とりあえず避けられた。ドリルはちょうどコンクリートの側壁を串刺しにする形で掘り進んでいたからだ。ほっとしたのも束の間、菅原は挫折感に打ちひしがれた。とうとう「人工構造物」の存在が露呈してしまった。この洞窟に大々的に他人の手が入るのもそう遠い事ではあるまい。有明の信管はここ数日間「もう少しで仕上がる」としか情報が来ない。初雁が途中で大幅な仕様変更を注文したらしくて、それが納期の延長に直結したのである。もっとも有明が最初に作った品は本当に花火用の「時限装置」で、指定時間が経過すると導火線に点火するタイプだったから、今回のケースでは使い物にならない。砲弾か魚雷の信管を直接作動させるか、あるいは信管ごと交換するか、どちらかのタイプでないと駄目なのだ。ただし一発弾ければそれで充分だ。

当初彼は卒業式当日に爆破を決行するつもりでいた。しかし事ここに至って、そんな悠長な事は言っていられなくなった。できるだけ速やかに事を済ませなければ。彼の焦りはいやが上にもつのった。

彼の話を聞いた初雁も、まさかそんな事態になるとは予想していなかったようで、かなりびっくりしたようだった。しばらく考え込んだ後、彼女は乗艦で有明と「三者面談」に入った。もっとも菅原ははらはらしながら横で見ているしかなかった。

初雁：「そんなに待ってられなくなったのよ。凝らなくていいから、とにかく単純なのを今すぐ作ってちょうだい」
有明：「そんな事言ったって、まだ図面ひいてる最中ですけど....」
初雁：「ちょっとそれ見せてよ」
（一瞥して）
初雁：「こんなに凝らなくていいよ！わかった、こっちの手札は全部出すから、これから言うようなの作って！」
（雪風の存在について説明する。至急を要して極秘である事も）
菅原：「いいのか、そんなにポロポロばらして！」
初雁：かっとなる「どうせ沈めるんだからいいでしょ！」
有明：むすっとして「....そういう事なら何でもっと早く言ってくれないんですか。はじめからそうだと知ってれば、あの次の日には仕上げてましたよ。それを花火だの何だのっていろいろ変な事言って隠すから....ﾌﾞﾂﾌﾞﾂﾌﾞﾂﾌﾞﾂ」
初雁：「わかった、今度学食のC定食*1おごるから？」
有明：「下のロマンのハンバーグ定食、ライス大盛り、チョコパフェ付き*2」
菅原：唖然となる「....腹こわすんじゃ....」
有明：「下のロマンのハンバーグ定食、ライス大盛り、チョコパフェ付き*3」
初雁：「本気？」
有明：「下のロマンのハンバーグ定食、ライス大盛り、チョコパフェ付き*4」
菅原：「わかった、俺が払うよ！」
有明：ケロっとして「3日下さい。そのくらいは大丈夫でしょう？....じゃ、まず、その『花火』を採寸させてもらいましょ」

2月28日、菅原達は「起爆装置」を手に、雪風にいた。

有明も一緒だ。彼女が作ったのは、言われても彼女の作とは思えないほど単純な「ローテク」製品だった。初雁が交通研からくすねてきたベニヤ板をA4大に切り分け、片隅に電池式のタイマーが固定されている。針の部分にはカッターの替え刃がセロテープで止めてあり、時間が来ると0分のところにやはりセロテープで止めてある縫い糸を切る仕掛けになっている。縫い糸の反対側は金槌に結び付けてある。その金槌は柄の部分に穴が開けてあって、調理室からくすねた菜箸の軸が通っており、軸は板に立てられた割り箸の支柱の上で回転できるようになっていた。また、その軸は別の縫い糸で引っ張られて一定以上前には進まないようになっている。ストッパーの無い支柱から金槌が落ちないようにすると同時に、やはり軸が前に行きすぎて信管を叩き損ねることのないようにしてある。そう。この時限装置は、思い切り信管を叩く事で魚

*1 学食最上級の定食。賄賂としてしばしば活用される。800円
*2 計2000円。ロマンは国道沿いのドライブイン
*3 計2000円。ロマンは国道沿いのドライブイン
*4 計2000円。ロマンは国道沿いのドライブイン

雷を爆発させる仕掛けなのだ。「普段の」有明なら、まずこんな単純な物は作らなかっただろう。
5人は協力して、魚雷の弾頭に荷作り用のビニールロープとガムテープでその装置をしばり着けた。作業は30分程度で終わった。一行はタイマーをセットする前に（結局60分しかとれなかった）見納めで艦内を巡回したが、雪風の霊は彼らに姿を見せなかった。

洞窟を出てから、有明は思い出したように、手を打った。
「しまった、カメラ持ってくの忘れてた」
「もう手後れ」初雁が呆れる。「そうね、そう言えば一枚も撮らなかったな、結局」

しかし1時間経っても、それからなお姑く待っても、爆発は起きなかった。
「そんな、馬鹿な」
有明の顔から血の気が引く。もっと焦ったのは菅原だ。
「....不発だったのか？」
「有り得なくもないね」初雁は一人冷静だった。「遅発信管だとしても、こうも遅くなる訳ゃないし....あしたもう一度、見に行こう。万が一が有るから」

翌日。彼らが発射管で見た物は、明らかな「失敗作」だった。間違いなく金槌は降り下ろされていたし、その金槌は狙いを誤らず正確に信管のど真ん中をヒットしてはいた。何かが足りなかった。そう、力である。
通常、魚雷はそれなりの堅さを持った鋼板を突き破り、弾頭部分が充分に目標の中に入り込んでから爆発するようになっている。そうでないと破口を最大限に拡げる事ができないからだ。従って普通の金槌の自由落下程度のエネルギーでは、びくともしなかったのだ。失敗して初めて選られた「教訓」である。
「参ったね」前髪を掻き上げて、初雁が呟く。
「まさかとは思ったけど」
「もっと大きなハンマーが有れば、何とか」有明が弾頭を恐る恐る調べながら、考えを告げていく。「でもそれだと、こなりごつい台でないと支えられないし....何かで電気的に作動させれれば、何とかなるかも」
「じゃ、それで行こう」菅原はわらをもすがる思いだった。
「でも、それはこの信管の構造が解らないと無理ですよ。どうやれば引き抜けるかも解らないのに、下手にやったらそれこそ一発で、ドカン」
彼女の手振りが話に怖さを加える。
「いっそ焼いちゃえば早いかな」朝比奈が辺りを見回す。「タンクのガソリンに火を付ければ、あとは簡単でしょ？」
「それも無理ね」初雁は即座に打ち消した。「この船はガソリンじゃなくて重油で動くの。重油はそう簡単に引火する物でもないわ。それに....」初雁はそこで一息ついた。「ガソリンに引火させてごらんなさい、逃げる暇なんか無いわよ？」
「仕方が有りませんね」
「わあ！」
不意に現れた新しい声に、一同は飛び上がった。
声の主は雪風だ。
「その金槌、私が預かりましょう。これで信管を叩こうという考え、決して誤りではありませんよ」
有明は少し自慢げに胸を張った。
「まさか、あなたが....」
菅原の問いに、彼女は無言でうなずいた。
「一つだけ聞かせて」
こころなしか語気強く、初雁が尋ねる。
「あなたは一体、誰」
「私はこの雪風の、船霊です」初雁はそんな事じゃなくて、と言いかけたが、彼女自身は気にせず続けた。「またの名を、巴と申します」
「Wow,TOME−GOZEN....!」
アーティが息を飲む。
「唐人も私の名をご存じとは、光栄ですね」雪風、否、巴御前は彼女に微笑みかけた。
「どこで私の名を？」
「WIZではずいぶん泣かされたし....」*1
「ういず？何ですか、それは？」
「お遊びです、ただの」有明が慌ててアーティにヘッドロックをかけて、話題を変えようと図る。「カメラ持ってきたんです、こんな事もあろうかと。記念写真撮りましょう、ねっ？ねっ？」
今度は有明がヘッドロックされる番だった。
「馬鹿ネ！ユーレイが写真に写る訳無いでしょ！ノーミソ付いてンノ？」
巴御前は再び微笑んだ。
「若い事は良い事です....それに」有明の手にあるポケットカメラに目が行く。「私は写真に写る事もできます。かなり力を使いますが」
「あんた、それ、どっかに送るつもりじゃないでしょうね？」
初雁の目が一瞬険しくなった。有明は力一杯首を振る。
「疑うんなら、ネガ預けます！」
「艦首の砲塔を背にした方が、見栄えが良い

*1 やっぱりゲーマーだな、こいつ

でしょう」巴御前が促す。「先にいらしていて下さい。私は支度がございます」

有明が三脚の準備を済ませた頃、巴御前が再び姿を見せた。衣を白装束に換えている。意味するところは明らかだ。
「ところで、誰がシャッターを押すのですか?」
真ん中に収まっていた巴御前が初雁に向いて尋ねた途端、フラッシュが光った。*1
「ああ、一枚無駄になっちゃった」有明が急いでカメラに向かう。「自動なんですよ!」

それから彼らは巴御前に案内されて、雪風の艦内をもう一度巡った。今度こそ、見納めになるはずだった。正体がわかってもなお、大概の場面で皆は巴御前を「雪風」と呼んだ。また、その方が自然に感じられた。
食堂では「雪風」の握り飯も振る舞われた。塩味しか付いていなかったが、それはそれで何か特別な味わいだった。
舷門で巴御前は彼らを見送り、言った。
「あなた方の事は一生忘れないでしょう....」
思い出して、クスリと笑う。「そう言えば、私はもう死んでいたのですね」
一同対応に困って引きつるしかなかった。有明とアーティの中途半端なボケとツッコミが染ったらしい。
「久しぶりに、若い頃に戻ったような気がします。それでは、卒業式の正午に!」
一行はタラップを降りると、それぞれのやり方で雪風を拝み、洞窟を後にした。

写真が仕上がったのは翌々日である。初雁が責任をもって現像に出した関係もあって、まずは女子で見る事になった。初雁の部屋に菅原以外の全員が集まったが、坂井は「その手」に関りたくない事もあって、自分から部屋を出た。かと言ってどこに行くあても無い。ドアの外でぶらぶらするにとどまった。

数分後。絹を裂くような悲鳴が立て続けに起こった。
慌てて坂井が部屋に飛び込むと、それまでのほのぼのは一転してスリルショーになっていた。
初雁は一枚手にしたまま白目をむいて失神している。アーティは床に伏せて、どこから出したのか小さな十字架を捧げて必死に祈りを唱えている。そして有明と朝比奈だけは、そんな二人を横目に、なおほのぼのと写真をめくっていた。
「凄いねー....」
「こんなにいたんだね....」
初雁が持っていた物をほぼ興味本位でのぞきこんでみて、坂井はようやく事態を把握した。写真には彼ら5人以外にも、乗組員らしき人物が数十名、そして白装束の女性が一人、記念写真よろしくまとまって写っていたのだ。他の写真は艦内を撮った物だが、「現役」の活気にあふれた様子がそのまま伝わっていた。あの時見た「死んだ」船では決してなかったのだ。

(続)

校長室(後半分)
実は今号では先掲の「前半」のみで済ませるつもりでした。「分岐点」が多かったので。ところが、多分他のページでも書くと思いますが、年末年始にデータ入力のバイトが入って文字通り完全に手がふさがったのと、その後うだうだやってるうちに卒業試験に突入してしまって印刷どころじゃないうちに、後半分のアウトラインをそれとなく書いていたら形になってしまったので、この際話を進めてしまうことにしました。不遜かも知れませんがそれ程キャラのロールから外れた進み方にはなっていないと思います。大外れだったら勘弁して下さい。
雪風の船霊が巴御前だったりするのは完全なフィクションです。ただ「船霊」の単語は存在するので、覚えておいても損にはならんでしょう。御前は木曽義仲の一族で、むっちゃ強い侍でありました。何でも平家物語によれば敵の大将の首を馬上から素手でねじ切って放り捨てたとか。後に越後で尼になったとの伝承も有るので、ああいう「おとなしい」キャラになった訳ですが。本当はラストで出てくるだけのチョイ役の予定だったのですが、話が膠着したので打開策として少々早めたものです。でももう少し早く出しておけば、他にもいろいろ面白いエピソードが作れたかも知れません。因みに、巴御前が決定になる前は某おキ○ちゃんがモデルだったというのは言っちゃいけないお約束。
なお今回のシナリオでは仏教科3年 *2 と国文科の4年生二人にいろいろ協力してもらってます。とりあえず末尾ながらここでお礼を申し上げておきます。あんがとさん。

---

*1 お約束のネタ一発かましときました(^_-)
*2 お約束通り坊主の卵

三等雑居室

B25。

・さわがしくなるままに、日暮らし、机にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくるをもって、菊名の御提督のいらへとせんとす。

とまあ、そういうわけです。浪人の身には近頃の冷たい風は身にしみますが、かといってデータ凍結をしない自分を「あさまし」と思わないではないんですが .... わっはっは、現役離れた人にはもう古文はわからんでしょう。すいませんね（←ちっともすまなく思ってない）。まあ、発行がゆっくりなのはこちらとしても大変助かります。

（東京都・日高耕）

菊：ご心配要りません。私は現役時代から古文が苦手で、漢文の不自由な人でした。それでいて文系志望だったってんだから無理がありますやね。しかも第一志望は歴史学科。*1 すべて算数／数学が古文／漢文以上に不自由だったのが .... ヤレヤレ！

岬：ちなみに「本居の先輩」氏は国文学科で上代を専攻してらして、このほど提出した卒論のテーマは「古事記に見る日本の妖怪」だったそうです。何でも参考文献欄に堂々と「水木しげる」の名があったと云う .... 未だによーわからん人です、あの人は。

後始末。

・クイズですが、誰の事か解んないです。調べようと思い段ボール箱の中から「 Born in Battle 」を発掘したのですが、残念ながら GG は既に消失してまして。

（神奈川県・遠藤誠）

菊：うーん、「 BinB 」を持っている方がまだおられるとは、うかうかしてられませんね。実はあの本が私の同人界公式 (?) デビュー本だったりします。大したもの書いてませんが。しかしそこまでやってまだ解りませんか？「超」が付くくらい有名な PC ですけど。もしかして、こんな事するほどまだ「彼女」にお熱なのは自分一人だけだったり ....?

・赤木の名誉のために一応訂正しておきます。あの手紙を書いたとき、解散の直接のきっかけとなったあるメンバーのことを思い出してしまい、興奮していたようで、読んだ人の誤解を招くような書き方をしてしまいました。その会誌の編集には山田も加わっていたので、特に言っておきたいのですが、私の目から見て、ですが、内容が一番良かったと思えるものは私が最後に手がけ、赤木がほとんど編集した ---- 事実上赤木が 95% 以上 ---- 号です。無論その後が悪いとかそういう事ではなくて、その後の会誌が本当に内輪のものだけになっていき、私の目指していたグローバルな編集（つまり他所からのゲンコーも載っけて、他所にも配る）が無くなってしまったからなのです。今にして思えば菊地さんの指摘した通り、視点の違いから来るもののようです。その証拠に、内輪の会誌としては充分な内容をもっていましたから。（でも収支報告と会費の要求が紙面のほとんどを使っていたような気もする）実際私がバトンタッチしてから、おそらく宮崎で初めてであろうコンベも、メンバー宅の庭で、私たち他２サークルを招いただけの非公式なものでしたが、開催されましたし。いやあ、あの頃は楽しかった。そういえば、あの頃つきあっていたサークルはどうなったのであろうか .... 無責任ですね、反省します。確かマジカルダイスとか .... そういえば、カルナヴァルという関西のコンベグループを主催していた人ともおつきあいしていたのですが、その人ＲＰＧマガジンに載ってました。ま、どうでもいいことですが。

（東京都・日高耕）

菊：まずい！と思ったらすぐフォロー。基本です。最近はこの最低限のお約束すらおぼつかない連中が増えてて .... いえ、 Blow の人ではなくて、他のとこでですが。とか何とか言って、最近は自分もその辺の手抜きが著しいので、あまり言えないのですが ....

FT。

・はじめ見たとき、機体リストが見辛いのが気になりました。あと、 Mig−29 が駄目って言うのも。個人的な見解でしょうが、どうも MiG−29 なんて使いものになるとは思ってないもので。（そこまで脅威を覚えるほどでは）

（神奈川県・遠藤誠）

菊：遠藤さん、小田原市役所のそばに行くようなことがあったら二三発ぶち込んどいて下さい。こんなに事務向きの「使える男」を不採用にした愚か者です。

さて、 FT のリストですが、そんなに見辛いでしょうか？確かに活字は小さい気がしますが、これは A4 を縮小してるのとページ数を圧縮するためでしたのでご了承願います。あとやっぱり機体側面図サボったのは失敗でしょうか？今回は他で比較的簡単に写真資料

*1 第一志望は東海大学でありました

が手にはいるのでいいだろうと思ったのですが ....

MiG−29 ですが、私やもともと変にのっぺりした奴が嫌い、という心理的かつ非常に個人的な偏見が有るのは否定しません。つまりそう云う事です。それだと F−14 とか Su−27 あたりも削除にしなきゃならないようですが、でかい奴は大体大好きなのでこれは通しです。他には、どこの PBM でも大概この二機種は絶賛されているので、いっそこれ抜きでやる「我の強い」のが有ったって罰は当たらんだろうと思ったのも一つ。 *1 今回は全機種タダにしたので（設定他が面倒だから）この二機種に参加者が偏るのも嫌だったし。ちなみに私は、「 F−16 ファミリーを根絶する会」の会員です。現在会員約一名、参加者求む！

・（前略） FT の機体リストの中に東側のやつもまざってましたが、あれも使っていいんですか。あと F−16 は機体リストから削除ということでしょうか。それと、 TFW、 EFW、 BFW、 CS というのはなんなのでしょう。おそらくこうではないかという予想で今回は書きますが。それから、キャラの年齢制限は有るんですか？ （東京都・日高耕）

正： FT の機体リストに東側がある件、今回はロシア（旧ソ連）が「表向き」多国籍軍に参加しているので、 PC が使用するのは全く問題有りません。要するに東側を単独でやるには機種が偏るし、プレイヤーの増加も見込めないので、西側に統合してしまっただけですから。 F−16 のことは（ MiG−29 も含め）その通りです。削除です。大元を記念する意味で掲載してありますが。

また、飛行隊の略号は

TFW=Tactical Flight Wing	（戦術）戦闘飛行隊	制空権の維持
EFW=Escort Flight Wing	護衛飛行隊	↓の護衛
BFW=bomber Flight Wing	爆撃飛行隊	対地攻撃
CS=Compound Squadlon	混成中隊	主に対ゲリラ

をそれぞれ意味します。念のため書き添えておきますが、 CS は空廠オリジナルであり、仮に同じ略号が実在したとしても恐らく意味は違うと思われるので、注意が必要です。間違っても知ったかぶってよそで使ったりしないように。混乱を招きます。キャラの年齢制限はありませんが、あまり古いキャラクターは個別に数値修整の対象とします。（落ちる、という意味でないのがミソ）

真鶴。

・（笹本裕一は）なんか、昔の作品の方がおもしろいなあ。「スターダストシティ」とか、「妖精作戦」とか。「スター〜」はもろにぼくの好みに合ってますし、「妖精〜」は真鶴にも通じるところがあっておもしろいです。

（東京都・日高耕）

菊：誠に申し訳ない。笹本裕一はノーチェックなのです。「マップス」とかの人だっけ？普通ならここで「本居の先輩」とか知ってる人にバトンタッチするのですが、今は休み中なのでそうもいかず。一応「雪風編」は「×××××××××」（以上 8 文字検閲）「宇宙戦艦ヤマト」「 RAISE THE TITANIC! 」それに「サイレントメビウス −CASE TITANIC− 」が下敷として有るのですが。

本屋。

・浪人中の身である私は当然の事ながら予備校に行ってるわけですが、その場所が神保町に近いのがいけない。三省堂が近いのは問題集を買うとかには便利なのですが、古本屋に吸い寄せられて .... ああ、センターまであと一ヶ月なのに ....。行かないようにしようとは思ってんですが、神保町駅を利用する機会が多いため、ずるずると。あはは。

（東京都・日高耕）

菊：御心配要りません。私は高三当時、近場の塾に行くのをサボり、時間潰しのために鶴見の総持寺まで自転車で「つうりんぐ」に出た馬鹿もんです。別にお参りとかじゃなくて、山門の前まで行ってすぐ引き返すんです。往復が時間にして大体一時間半でちょうど一時限分、家に着く頃は適度にくたばってるので家族の誰にもバレなかったという .... しかも受験が近付くにつれてその頻度が上がってたってんだからもう終わってます。結局塾なんて自己満足の為に行くような物ですから、行かなくたってさほど影響はないわけです。神保町は今度「東陽堂書店」をめっけたら、二三発ブチ込んどいて下さい。こんなに本屋向きの「使える男」を不採用にした愚か者です。三省堂のすぐ近くですんで。

岬：最近めっきり足が遠退いてましたが、お

*1 要するにただのわがまま

薦めは漫画の「高岡書店」（コミック高岡）と政治/軍事系の「廣文堂」(?)あたりです。他にも何軒か有りますが .... 概して私は店名より場所で覚える性格なので、ちょっとここでは説明できません。
宇：....そうですね、彼の有名な「芳賀書店」は一度のぞいておかないと *1 神保町に行ったことにはなりませんので、一応行ってみて下さい。いい経験になりますよ。

・（創竜伝 9 が）どうせまたいつものようにポシャるんだろうと思ってたら、珍しく 11 月中にでましたね。話の筋としては特におもしろいわけでもなく、逆に尻切れトンボな終わり方でしたが、予告期間内に出たというのが驚きです。うーん、すごい。しかし考えてみると、田中芳樹は年々遅筆になっていってるような気がします。確かタイタニアの 3 巻だったと思いますが、その背表紙に「一年に一度会える新作」とか何とか書かれてあったのが 4 年前。あの頃はアルスラーンも一年に一冊は出たんだよなあ。一体タイタニアの続きはいつ出るんでしょうか。近頃は文庫化や「田中芳樹読本」などと云うだまし本で命をつないでいるようですが ....

（東京都・日高耕）

宇：むかーし昔、ある所に、スペオペにのめり込みだした若者がおりました。若者はある日「◎ UT」と云う雑誌で「銀河英雄伝説」という大作を知り、無い貯金はたいて本編全 10 巻を一度に買いましたとさ。一週間で読み切った若者はやがて「外伝」の存在に気がついて、またわずかな小遣いをはたいてあわてて 4 巻まで買いましたとさ。しかしそれからというもの待てど暮らせど続きが出ず、「6 巻まで出る」はずの外伝を待つうち、若者は大学へ上がり、とうとう卒業に手が届くまでになってしまいましたとさ。めでたしめでたし。
菊：そりゃ俺のことじゃんか。しかも全然おめでたくない。早くあと 2 巻出せー！いい加減本編のストーリー忘れちまってるぞ !?
笠：それあたしも一緒ー！「PPM」って、確か「日本沈没」がネタなんだっけ？
岬：いや「サイレントメビウス」のパクリだ。
正：馬鹿「ブレードランナー」の間違いだろ。
菊：はうぅ ....っ！

ラヂヲ。

・毎週土曜の午前一時からのロードスとワーブレのラジオはテープにとって、あとで聞いてますが、ラジカセが安物だからか位置が悪いのか知りませんが、雑音がバンバン入ってくれています。聞くところによると、どうやら韓国のプサンにあるラジオ局だそうですが、韓国語特有のあの情熱的な話し方、行進曲みたいな音楽が、「ウンディーネ、私たちを守って」とか言ってる最中に聞こえて来るんです。あれは止めてほしい。周波数が同じらしいんですが、それならそれで、東京まで届くようなパワーで発信してほしくないものです。
　そういえば、ロードスのカセットブックでスレイン役をやっている人（名前は忘れた）が、今度はアズモ役をしてますね。ご本人はスレイン役がいいみたいに言ってたけど、けっこうアズモ役にあった声ではないかとも思いますが、ヒーローの仲間から一転、敵役になるなんてことあるんですねー。

（東京都・日高耕）

菊：役柄と言えば、今はなき「特捜最前線」の、「おやっさん」こと船村刑事をやっていた大滝秀治氏は、それまで犯人役の方が多かったそうで、当時のインタビューを見てみると「いやー、何か変な気がしますね」と言っておられます。結構こう云うのは多いかも知れません。ラジオの深夜放送は、最近は某国営放送のやつが静かでお気に入りです。寝入り端、布団の中で本読みながら聞くには最適。
笠：混信するそのラジオは ....彼の有名な「平壌放送」ではないでしょうか。それが拾えるなら、「場所がものすごく良い」か、「感度だけは高い」かのどちらかでしょう。こないだ自分のラジオのセッティングをやってる最中に、（15 局まで記憶できる）950kHZ 近辺で拾いました。珍しいのでしばらく聞き入ってしまいましたが ....他にも謎のフランス語放送が 1600kHz 近辺で時々入ることがあります。一般に、国交がある近隣国同士では周波数に関する協約があって、なるべく他国の放送に混信しないように調整されているはずですから、プサンの放送が入ることはまずないと思いますよ？
菊：ところで、受験の経過はどうでしょう？今年こそは報われると良いですね ....

流浪人。

・リターン・マッチって、大丈夫なんですか？いやー体面的な問題とか、いろいろと身に覚えがあるもので（苦笑）。まっ、「来年は頑張って下さい」としか言えませんが。

（神奈川県・遠藤誠）

菊：えー、お騒がせした後で何ですが、25 号を出した直後に、電撃的に就職先が決まってしまいました。こちらはもう留年する腹でいたので大慌てで講義に出直す今日この頃。行き先は、「横浜市内の某社会〇〇法人」と

*1 大恥かくので大きい声で誰かに聞いたりしないように。

までしか言えませんし、言いたくありません。勘の鋭い方ならお気付きでしょうが、コネで無理矢理入ってます。家庭の事情が無闇な留年／浪人を許さざるレベルにあるようで、知らない所で話が進んでました。職務内容から言って私の精神平衡がそう長持ちするはずがないので、公務員試験に受かるまでの「待避側線」のつもりでいます。コネ使って居座るのも肩身が狭いですしね。で、そんな事もあってか最近浪人ものにはまりつつあります。チェック入れてるのはジ〇ンプの「るろうに剣心」とアフタヌ〇ンの「無限の住人」、どちらかというと「無限の住人」の方が渋くて好みですね。無闇やたらと「～ござる」を使わないし。使いがいのあるシーンがテンコ盛りだし。何つったってお凛ちゃんがかーいーんだ、これが。（←結局ヒロインで買ってる）「るろうに剣心」も参考にはなるのですが、明治初期と時代を切っている割に考証が甘いのと（少年誌用だから仕方ない気もするが）、セリフが「ござる」調（よりによって主人公が！）になってるのが玉に瑕。せめて「ござる」だけは勘弁してくれればねー、内面での評価がぐんと上がるんだけど。勢い余って浪人ものの PBM なんかおっ始めたり何かして ....。しかし何か他人の作品を見る度に、どこか使える部分がないか鵜の目鷹の目になる悪癖は直らない物だらうか ....。

ゲーセン。

・三等雑居室で Wing　War の話題が出てましたが、ボクもあれにはハマりました。（笑）当然乗機は当時"ディアブル・ルージュ"と恐れられた、赤い三葉フォッカー Dr. I です。あの烈悪なまでのロケット弾が良いんです。直撃じゃなくともダメージ与えられるし（笑）相手がコンピュータなら結構楽かも。

格闘ゲームはストリート・ファイター（六年くらい前に出た仮符号１のこと）の頃から一切手を出してません。あの手のゲームは必殺技が入らずつまらない思いをするのが目に見えているので。　　（神奈川県・遠藤誠）

菊：おお同志！私も同感です。最近ようやく安定してパワーグラデーションが出るようになりつつあるのですが、気がついたらサルロットがずいぶん弱くなってるので愕然。今さらハコノルに乗り換える度胸もなく。そういえば、初代ストリートファイターを初めて見たときは、何を勘違いしたのか「あー、これがいわゆる 18 禁かー ....」などと思ったものでした。それまでしばらくの間ゲーセン暗黒時代があって、「ラリーX」あたりが最新ゲームだった頃からの情報がまるきり欠落してるので ....て、言い訳にもなりませんね。

・基本的に格闘ゲームはやらない（やれない、やったら最後というほど下手）ので、シューティングやアクションしかやらないんですが、近頃あまり良いものが出ません。まあ「GUNBIRD」と「SONIC WING 2」、「雷電２」、「天地を喰らう２」ぐらいですか。どれも近頃は古くなったけど ....。昔は「King of Dragons」に燃えた時期もあったんですが。しかしセンターまで一ヶ月無いというのに何をやってんでしょね。はっはっは。
（東京都・日高耕）

菊：ご心配要りません。私はセンター前日にパチンコヴァージンを失った男です。おまけに大学上がってから、３年次年度末試験前日に競馬処女も失いました。で、どっちもまだ大当たりを引いたことはないです。やれやれ。しかし最近この手の同志が増えつつあるようで、類友か何か知りませんがうれしいことです。

・（VG が）何でフライトシミュレータかって ....「Variable Geometry wing」って可変後退翼の事でしょ？　　（京都府・山田国見）

菊：でーっ！そっちで来たかあ！そりゃかなり無理があると思うんでげすが ....そういえば VG ってパソゲーだったんですね、こないだ知人が買ったのを見て（釈尊に誓って私はプレイしてません！）初めて知りました。聞くところによると「格闘ゲームとしては"ぬぎぬぎ"がジャマ」「"ぬぎぬぎ"としては格闘がジャマ」というとんでもねー中途半端なソフトだそうですが（と私は解釈した）、実際にプレイした方、レポートを求む。

TRPG。

・どーして B-Roads を笑うっっ !?

てな事言って一体何人わかるのやら、ファンタジーではいっと一好きな背景世界なのに。システム腐ってるけど。でも B-Roads って時点で D6（本人註：６面ダイスのこと、こんな言い方するようになるともう戻れない）だけではすまないと思うのだけど？で、もう一言。

冒険者が職業かっ !?

というのがあって、"日本でもっともメジャーなシステム"ソ〇ドワ〇ルドの影響か、はたまたフォ〇チュン・クエストの影響か（何だよフォ〇チュンのあの世界は）職業的冒険者が社会的に認知されているってのは何か変ですよね、ね？

という趣味の話はおいといて ....まじめな話テーブルトークのページができるのはいいけど何となく他のページが喰われそうで恐い。Blow の読者にはそんなに RPG のゲーマーいないのかもしれないけど、恐れ多い例えかも

しれないけど「TACTICS」みたいなのも有ることだし、ちょっと不安。

（京都府・山田国見）

菊：よりによって季里由紀本人がコミケにかこつけてレス付けを拒否しやがったので、これも私が受けます。私はDD以来「剣と魔法の世界」からほぼ足を洗った人なので何とも言えませんが、「R to R」は「すごい」と聞いています。....「B−Roads」とは違うのでしょうか？（←所詮この程度）

ところで、実は私は「職業的冒険者」容認論者です。だって、現に冒険で飯食ってるんですから。ソーワーでしたか、副業で冒険者以外の職が取れるの。それもまた一つだなとは思いますが、所詮世界観などシステムの数ほど有り、マスターの数だけ有るものなのです。それを云々するほど不毛な事はないでしょう。In Rome as the Romans do.

ページを喰われるのはご心配要りません。他ならぬ私がマネージしているのです（それが一番不安だという説も有るが無視）、Blowが「剣と魔法」に制圧される可能性は無いと断言できます。この本では常に「銃砲と科学」が勝利者です。誰が自分の手に負えない世界「だけ」の本を好き好んで出すものですか。あくまで「お新香」としての位置づけによるものです。「メカばっかり」だとついて来れない人がいますんで、誰とは言いませんが。これから人集めをやる上でも不利だし。

日程。

・（バトテ）参加できません。せっかく近くにいるんだから参加したいんですが、1/15というとセンター試験日なんです。....ああ。

（東京都・日高耕）

菊：このことにはあとで気がついて真っ青になりました。4年前に自分で受けてるのに、ヤキが回ったと悔やむことしきり。しかしながらフタを開けてみれば、参加辞退者続出で結局お流れ。しかも、当日頃には自分自身が金欠から参加不能という、あまりにもお粗末な結果に終わったのでした。春（4/8あたり）にリトライ行くので要準備のこと。

SLG。

・さる筋から「空軍大戦略」が手に入ったのですが....私は基本的に「大戦略」シリーズの評価は高い方でしたが、今回のは認めんぞシ○テムソ○ト！なぜ陸攻が米軍機の一撃で落ちぬ！なぜ陸軍機がB−17を撃墜する！そして何よりも、なぜ零戦がB−36の高空爆撃を阻止し、何ヘックスにも渡って追いすがり、そしてしまいには30機編隊を全滅させる!!!?

元来既成システムには従順な私ですが、これは理解の範囲を外れ、我慢の限界を越えています。断固データを書き換えねばという一種「使命感」にも似た熱意に燃えています。「ここをこうするとこうなる」式の情報切に求む。

（編集部・菊地研一郎）

ぎゃふん。

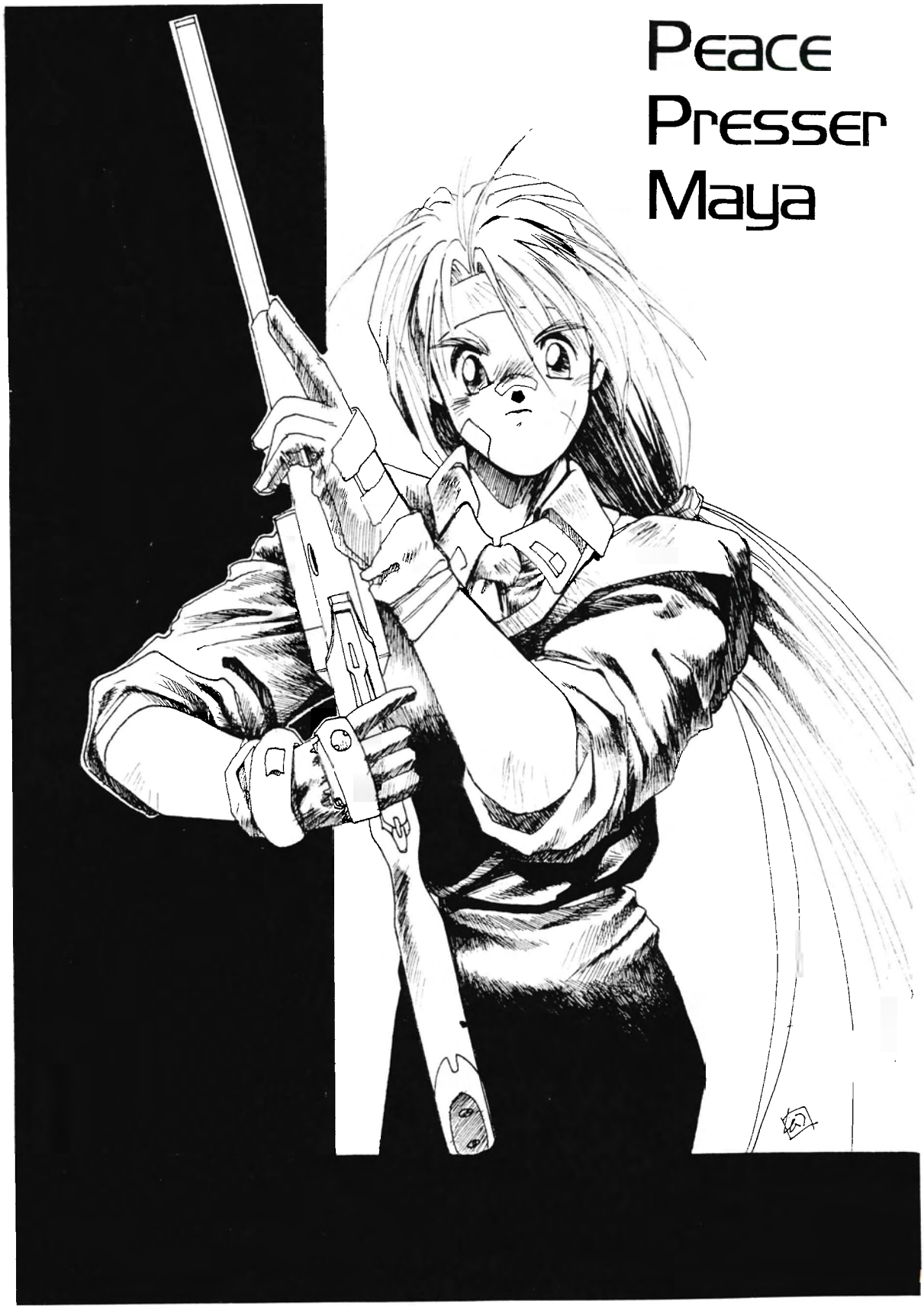
・年が明けてから何かの弾みに「ブルーシード」を見てしまいました。....絶句。オープニングの後半で自衛隊の出動シーンが有りますが、あれなんか昔「真鶴」のアニメＯＰを考えてた頃によく思い付いたシーンそのまんまです。（あれで出てくる自衛艦はおそらく「しらね」でしょう）誰しも考える事は一緒、というソ連機モードにモロにはまってる自分が嫌で嫌で....で結局ビデオチェック中だったりします。ＬＤ集出るようですね....「逮捕しちゃうぞ」をプレイヤー買う金も無いのに買ってる私はどうすりゃいいのでしょう。嘆息。とりあえずはサントラＣＤで我慢してます。ＯＰテーマが久々に気に入ったので。そう言えば最近のアニメは本当に、ロクなのが無いですね....いっそ「無限の住人」をテレビ放映するような（アニメ化に限らず）ガッツの有る会社は無いでしょうか....

（編集部・菊地研一郎）

注意。

今回、このページは年末までに仕上がり、圧縮されてハードディスクの中に放りこまれてそのまま眠っていました。記事に時間的隔たりが有るのはそのせいです。笹本裕一の話はこの間試験で大学行ってる内にやっちまえばよかったのですが、試験に忙殺される内に（11科目も有ったんだよう！）休みに突入。無念です....

こうゆうトコの
穴埋めカットも
有ると大変ウレシイ。
95.02.07 あ


Peace
Presser
Maya

１３：震災の被害は相変わらず急ピッチで進められている。このところ緩上昇しかしていなかったこの国の経済が、一気に息を吹き返したらしい。時代は今、建設業。（笑）

ヤーニャが「自発的」にネットダイブをはじめてから、半月が経った。私にはよくわからないが、ネットワークの復旧もすごい勢いで進んでいるらしい。日が経つに連れて「二次曲線を描いて」流通する情報量が増大しているのだという。「怪しげな」ファイルもそれにつれて増えているので、ヤーニャ一人では到底さばききれない。彼女が一日に処理できる情報量は、下手なパソコンよりははるかに高いらしいのだが、結局はあのスプートニクの再生品のサポートを得つつ地道に作業を進める事になった。彼女は今日も私の家に缶詰めである。

で、私は今、県警のパトカーで厚木へ向かっている。厚木には連邦軍の基地があって、北京やウラジオストクには及ばないもののそれなりに物資の出入りは激しい。そこで武器の横流しが行われるという情報を得て、検挙に向かうことになった。

本来これは所轄の仕事なのだが、相手が相手だけに県警を挙げての大捕り物になってしまった。私らもその応援組である。応援だから、気は楽だ。包囲が形になるまでこちらの存在を隠さなければならない気兼ねもないし、まあ、言ってみれば大昔の西部劇の騎兵隊みたいに堂々とパトカーを乗り付けて、取り引きを現行犯で押さえて、手錠かけて、それで終わり。もっともサイレンを鳴らすわけにはいかないのが歯がゆい。

受け持ちの場所に着いて装備の確認を済ませると、----とは言っても防弾チョッキと各々の銃器類、サブマシンガンとかその手のエリア・ウェポンの動作確認だけだ----私らの緊張が何かの冗談のような光景だけが、辺りに展開していた。軍の基地というと言葉面では妙に物々しい印象を与えるが、実際に行ってみると拍子抜けするほど静かで、平穏だ。厚木は今は輸送部隊の基地だから、よけいにそう感じるのかもしれない。一線部隊の基地でやっているような緊急離着陸の訓練なんかは無いのだ。昔はここもそんなことが有って騒音問題が大変だったらしいが....時間は偉大だ。

車から出て辺りを眺めまわしていると、少し肌寒さを覚える感じのそよ風が、フェンスをすり抜けて吹き寄せる。ススキがなびく。秋だなあ....のほほんと考えを巡らせる。思えば、この間私が襲われたのは夏の始めだった。大地震が有ったのも同じ頃だ。まだ数ヶ月だが、もう数ヶ月。考えたくないが、このまま迷宮入りか....?

いかん、こうやって年を取ると、後々ろくな事にならない。

思った刹那、信号弾が上がった。赤、突入である。....反射的に運転席に飛び込むが、視界の横で別の色の信号弾が上がる。緑？黄色？青....っ？

あまりの事で真っ白になって、私はまた車から出た。何が起こったかは大体予想できる。突入は失敗だ。こちらの進入路を確保し、同時に退路を断つ県警の特殊部隊が、何かでへまをやらかしたのだろう。あるいはただ単に運が悪かったか。

おやと思う間もなく目標の倉庫の影から、スリムな機影の攻撃ヘリが姿を現した。それが何を意味するのか、正解を突きつけられるまでしばらく時間がかかった。私だけではない、その場に居た全員がだ。まさかそんなものまで用意していたとは。いや、軍が絡んでいるのだから、そのぐらい予想してしかるべきだった。

最初の被害に遭ったのは私らから見て左手の森の中にいた連中である。彼らは滑走路を封鎖し、また一部は横断して駐機場を押さえ、犯人が空へ上がって事態をややこしくするのを防ぐ。それが機首にある旋回式機関銃の餌食になった。

多分パトカーだろう、何かが爆発してキノコ状の赤い爆炎が巻き上がる。一個、二個、それからたくさん。それでもまだ私はしばらく茫然としていた。まさか、そんな、馬鹿な。誰かが逃げろ！と叫ぶが、誰も----叫んでいた当人も----動かなかった。何の実感も湧かなかったのだ。

次が私らだった。左手の方から弾着らしい砂埃が上がって、同僚が何人か別の物みたいに跳ね上がった。そうなって始めて、私は伏せた。開いていたドアを盾代わりにする程度の理性はまだ残っていたが、どだいそんなもので戦闘ヘリの機銃掃射をしのげる訳はない、たちまち本体は蜂の巣になって、粉々に砕けた窓ガラスが私の方にも降り注いでくる。だが爆発はしなかったし、弾はかすりもしなかった。よかった、運はまだ私にも残ってる。そう思うと、余裕が出てきた。コンマ１秒以下でただのスクラップになってしまったこのパトカーも今はまだ何とも無いみたいだが、この先爆発しないとは限らない。燃料タンクがザルになってる事は請け合えるし、だとしたら他の奴の火でドカンと行くのは確実だ。とっとと逃げよう。

都合のいいことに、私らの後ろにある道路のすぐ向こうは、鉄道線路の切り通しにつながるなだらかな下り斜面だ。タイミングを図る余裕が有ればこそ、私は息もつかずにその「天然の掩体」へ転がり込んだ。

亀みたいにのぞき出してみると、ヘリは図に乗って駐機場に並んでいる軍の機体にまで発砲していた。よくは見えないが、管制塔ももう駄目だろう。仲間だろうか、他にも何機

かが上がって一緒になってて当たりしだいに撃ちまくっていたが、すぐにどこかへ飛んで行ってしまった。すぐに一番無事そうなパトカーへすっ飛んで行って、無線をつかんだ。.....が、こういう時はとことんまでツイていないもので、無事な無線機は一つとして無かった。やれやれ。駆け足で伝令だ。

もう一度辺りを見回すと、そこは「戦場」としか形容しようのない惨状だった。無傷でいられたのが不思議なくらいだ。仏様に感謝。健常者の務めを果そう。

厚木基地正門前に設けられた本部まではどう急いでも３０分はかかる。途中の公衆電話で救急車の手配を済ませた私は、それからすぐにタクシーを捕まえたが、それでも本部に着いた頃にはすっかり息が上がっていた。このところこんなに長い事走った事はなかったから、すっかり体が鈍ってしまっている。

タクシーでだいぶ時間を稼いで事件発生から約10分で正門に着く。肩で息をしながら衛兵に身分照会を済ませ ----ICPO の ID が制服に放り込んだままになっていたのが幸いした ---- 本部が置かれている基地本部塔まで、借りた自転車でさらにすっ飛んでいくと、そこはそこで大騒ぎになっていた。軍の人間まで一緒になってわめき散らし、周囲に指令を飛ばし続けている。警察側の隊長は顔見知りだった。警察学校で教わった事がある。

「尼崎か！いいところに来た、すぐに格納庫の状況を確認してこっちに知らせろ！駆け足！」

隊長は言うだけ言ってすぐにまた電話にかかりっきりになった。どうも空軍にヘリの追跡を頼んでいるようなのだが、撃墜の可否でもめているらしい。そりゃそうだ、軍にしてみればさっさと撃墜してしまった方が気が楽だ。ただこれでは警察の方が犯人と証拠物件を失う訳で、たまった物ではない。

東京上空で空中戦をやらかす分には震災の被害者へのいい景気付けになるだろう。ただしそれで撃墜機が市街地に突っ込んだら、どちらが落ちようと軍が袋叩きになるのは必至だ。ただでさえひどいのに追い討ちをかける訳だから。しかもそろそろ復興が形になり始めていると来た。最終的には、軍は警察の言い分を飲まざるをえない。どうせこっち側で先にそれを言ったものだから、軍がメンツにこだわって四の五の抜かしているのだろう。軍と警察の仲が悪いのは今に始まった事じゃない。

「何してる、早く行け！」

頭の中で室内を論評していると、頭ごなしにまたどやされた。くわばらくわばら、言う通りにしといた方が身のためだ。

本部塔から滑走路まではだだっ広い直線道路一で本だ。坂も無いから力任せにこいで行けばいい。軍の車輛も慌ただしく動きまわっていて、何度か事故りかけたが、3分で一番ひどいところに到着した。---- しまった、無線借りてくの忘れた。

とりあえず、辺りを歩き回ってみた。まだタンクごと航空燃料が燃えたあとのきな臭いような、薬臭いような毒気が漂っている。時折弾けたような音もするのは火が消えきっていない証拠だ。消火剤がまかれなかったのは、火の程度が大した事無かったからだろうか。何だったとしても証拠品がぐしゃぐしゃにならない事は助かる。いつだったか、火災現場から時限爆弾の図面を回収する羽目になった事がある。何故かはまた別の機会に話すとして....あの時はひどかった。結局図面は役に立たず、解体は勘でやった。

何人か、まとまって倒れていた。火傷や外傷は全く無い....息も無い。何だろう、火事で酸欠になったかな？

死体の回りだけ、妙に偏って何かの部品みたいな物が散らばっているのも気になる。対人地雷みたいな物とも違いそうだ。はじめ気付かずにいくつか踏み潰したが、その感触ではプラスチック形の材質だ。

そして、「大当たり」を引いた。

全く無傷のトランクケース。ダイヤルロックになっていて、適当に回していたら意外にも開いてしまった。これには自分で面食らったが、中身を見て更に面食らった。

私の家の間取りだ。ICPO の仮事務所が入っている、新宿旧都庁ビルの見取り図も入っている。何でこんなもの、奴等が持ってるんだ。

更にそういった図面の下には、見た事もない言語で書かれた書類がびっしり。あるものは数字の羅列。またあるものはただペンで落書きしたようにも見える。こっちの方は高校で歴史の授業の時に見た覚えもある。イスラム文字だったっけ....？

それより謎なのは、何でこんなものが無傷で残ってるのだろう。どうもこの現場は、証拠品が残りすぎている。できすぎた話ってやつは、かえって謎が増えるって物だ。

「貴様、何者だ!?」

不意に外の方から威圧するような声がした。きっとなって振り返ると、逆光になってちょっと詳しい事は判らないが、兵隊が何人か立っている。

「ICPO の捜査官だ！」

言い返しながらそっちの方へ歩く。だいぶ近付いてから、彼らが「MP」の腕章を着けているのが判った。やれやれ....面倒なのに捕まった。警察と憲兵ってのは、もろに権限が対立するから、できれば関り合いになりたくないのだが。

「や、ご苦労様です」隊長らしいのが敬礼するが、明らかに事務的で、中身はない。いつも通りで、そしてすぐにお約束通り例のやつ

が来た。「すぐにここから退去して下さい」
「は？」
「機密に触れるので詳しくはお知らせできません。とにかく、すぐに基地外へ出ていただきたいのですが」
何で軍って奴はいつもこうなんだろう。どうせ１００年前も１００年後も同じ事をやり続けてるんだろう。人のこた言えないが、警察だってちっとは変わってる。
「しかし私も本部の指示で動いてましてね」
一応の抵抗を試みるが、敵も答えは用意していた。
「おたくの本部も既に撤収し始めていますよ」
やれやれ。よほどかき回されたくない何かが有るらしい。私は無言でその場を後にした。例の外傷のない死体の事も有る、下手すると神経ガスの流出なんて事も考えられる。
本部の撤収作業を横目にとっとと基地を出て、ゆっくり歩いて駅へ出る。
だいぶ駅に近くなってから、はじめてまだ持っていた鞄の事を思い出した。
何で奴等はこれに気がつかなかったんだろう？

14: さすがに電車の中で例の鞄を開けるのもためらわれたので、家でゆっくり翻訳する事にした。署でやるのはどうも気が進まない。うまく進めば確かに早く済むし第一楽だが、えてして横槍が入ってどっかへ消えてしまう。殊にこの手の「怪しい」資料なんてのは、最後の奥の手に自前でキープしておかないと、完全にパーになってしまう。一旦自宅に寄ってヤーニャに預けてから、署に戻った。
署は署でさっきの事件の事でもちきりだった。帰りがけに相模大塚の駅で連絡は入れていたが、やはりそこはそれ「奇跡の生還」だ、正面から入って行った時には窓口の連中からじろじろ見られる結果になった。裏口から入っておけばよかった。
「ご苦労だった」
がらんとした刑事部屋を見渡しながら、課長は私を見るなり、そう言った。
「早速だが、ICPOに戻ってもらおう」
いきなりの事で開いた口が塞がらない。
「お前さんが来てからこっち、県内でも訳の判らん事件が起きるようになってきた。それまではそれほどでもなかったのに、だ」
ははあ、要は厄介払いか。
「我々でも、我々なりに調べさせてもらった」
課長は机の脇からファイルの束を取り出した。ICPOではついぞ見なかった、青い厚紙でできたコクヨのA4バインダーで、どれもぎっしりとレポート用紙が挟まっている。
「地震の前に君があっちでケリをつけそこねた山だが....あれは結局、神奈川署の方で上げた別の山からケリがついた」今までにもよく有ることだ、別件逮捕は。「更に調べてみたら、君にもあながち関係ないことが判ってね」
訳が判らない。黙って聞いてる方が良さそうだ。
「今、君の家に、ロシア人が居候してるね」
「はあ」
「彼女が実際に入国してからICPOに出頭するまで、約二週間のブランクが有った。これは公式記録による物だが、実際はそれよりも前に居たのではないかという情報が我々の手元に有る」
じゃあ、大方ICPOでも同じ情報は持っているだろう。あるいは「上」の指令でそうなっているのか。
「こちらは別に、あのロシア人に興味はなかった。しかしだ、最近こっちでレッド・ルートのコードネームをつけた武器密売ルート関連の事件現場に、奇妙な一致が見られることが判った」
何か嫌な予感がする。
「警察無線に不可解な割り込みが発生するんだな」
一瞬の空白。
「そして現場に居た連中の話を総合すると、非常に特徴の似通った人物が一人、浮き上がった」
「私ですか」
課長は答えないで、写真を一枚、ファイルから取り出して机に出した。

唖然となった。

そこに写っていたのは、ヤーニャそのまま。
モンタージュ技術が格段に進歩したおかげで、私も何度か恩恵にあずかったことは有るが、しかし今こういうシチュエーションでその「成果」を突きつけられると、どうも辛い。喉元が締め上げられるような、というと解りが早いだろうか。
「それにお前さん、いつの間にVANのスペシャルIDを取得したんだ。あれほどコンピュータに毛嫌いされていたというのに」
「何の事でしょう」
「とぼけても無駄だ」課長の目の奥が光る。
「こちらでは既に、お前さんの電話回線がVANのメイン・データベースに幾度と無くアクセスしている事実をつかんでいる」
あの馬鹿！何だかんだ言ってしっかり尻尾掴まれてるじゃないか！
「今時電話回線をそのまま使ってアクセスする奴など、そういないからな。VANから警視庁経由でこの山が回ってきて、結果が判った時にはこっちもびっくりしたぞ。....一言言っておく」
課長が少し出ている腹の前で手を組み合わせた。
「あのロシア人にはあまり構うな。その方が身のためだぞ」
「それは命令でしょうか、それとも警告でし

ようか」
「好きにとれ」

署を後にするのにあれほど気まずい思いをしたのは今までなかったことだった。
（続）

空技廠からのお知らせ

好き者の皆さんならご存じと思いますが、今年の8月15日に、零戦が名古屋に飛来します。21型のレストア機で、オリジナルの栄エンジンを搭載している公算が高いとのこと。やったのはミたしてもアメリカ人てのが情けないのですがやはりこれは見に行かなければ空廠をやってきても仏作って心入れずと言えましょう。
よって今年の夏は名古屋へ行きます。
夏コミとぶつかっていようと何だろうと、とにかく今年は名古屋へ行きます。

小牧空港で、僕と握手！（古い....）

この余白は
五太郎(W)の書式設定を
ミスった為に生まれました
愚か者と笑って下さひ……

To be continued !!

まあ…

着くわけねーな
当然。

…あのう…

ここはどなたの
所有なんでしょう…

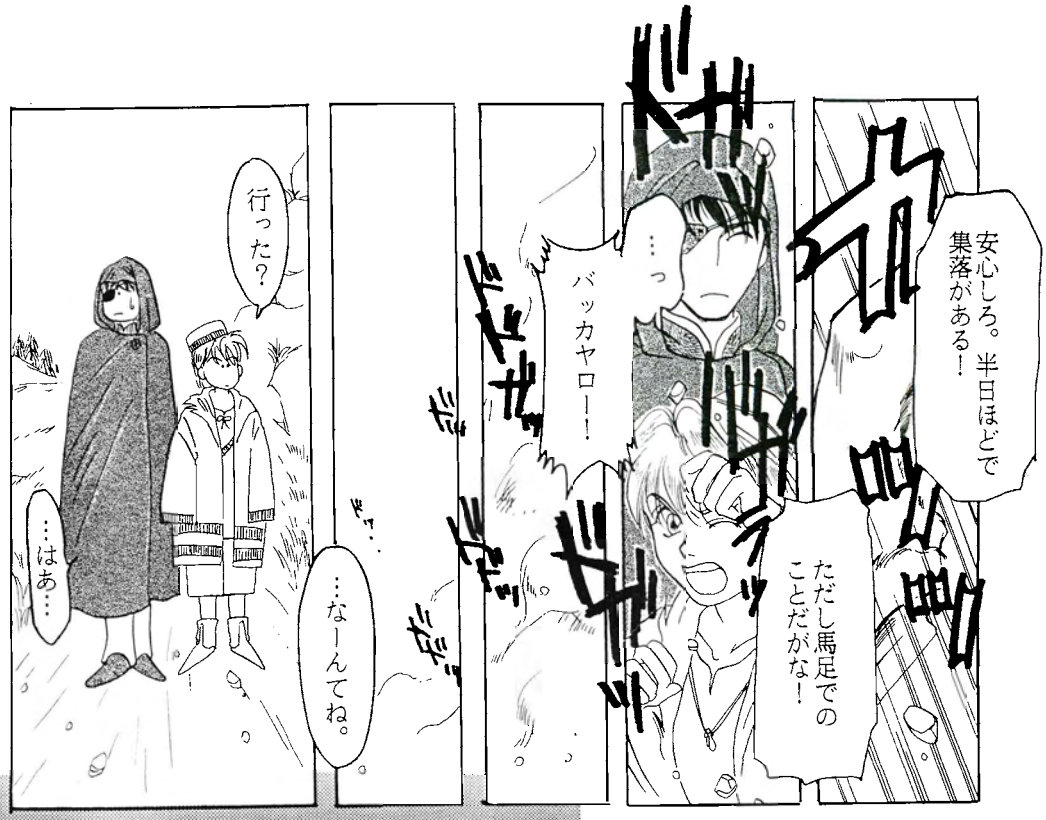
さーねぇ。

さーねぇって、
不法侵入ですよ!?

びくっ

NO Problem!

不法


安心しろ。半日ほどで集落がある！
ただし馬足でのことだがな！
…っ
バッカヤロー！
…なーんてね。
行った？
…はあ…

それにしてもよくあんな…
盗賊にしちゃ身なりが良かった
僕に来たから僕の追手かと思ったけど
それにちゃちょっと足がつくのが速いかな…ってね。
ぽいぽい。

しかし半日かぁ…馬でも

せまい。

なっ…
何すんだよいきなり破れちゃったじゃないか！
…違ったか…
やはり反対か…
近くに村はないか聞こうとしただけだぞっ！何だよ！
……
小僧、娘を見なかったか
15、6くらいの黒髪の娘だ
…最後に見たのは2日前の隊商(キャラバン)だけど
娘って言えるのは入ってなかったね…
…って、待てよぉ！村はって聞いてんだろォ！

Strain
at the
Leash

…そうなの
何だかドキドキするの
およそ120M前方より騎馬が3体
こちらに接近してきます
そんなの見りゃわかるよ
…聞いてみよっか。
ぺろ
今日はきっと良い事があるよ
うわっ！

今月は

りえちんぐ